

ANNUAL Report

年報 2019



愛媛大学総合情報メディアセンター
Center for Information Technology, Ehime university

CiTE

■ あいさつ ■

愛媛大学総合情報メディアセンター長

樋上 喜信



本センターは、平成 15 年 4 月に発足いたしまして、情報基盤の整備を図り、教育研究活動の支援及び情報技術に関する教育研究を行うとともに、学内外の情報化に寄与することを目的に、情報教育、学術研究支援、ネットワーク管理などの業務を幅広く行っております。平成 30 年 4 月からは、情報基盤・セキュリティ部門、ICT (Information and Communication Technology) 利用教育・情報サービス推進部門を設置し、業務に当たっております。

計算機システムやキャンパス情報ネットワークは、学生、附属学校生徒及び教職員にとってなくてはならないものであり、それらの利便性を向上し、常時安定的に利用可能とすることは、本センターの最大の使命と思われます。一方、情報セキュリティの問題に対して万全の対策を施し、インシデント発生時には迅速な対処が可能な体制の構築が求められております。また、e ラーニング等による効果的な教育システムの構築やサービス提供、情報リテラシー教育への寄与なども本センターが果たすべき役割の 1 つと思われます。

昨年 9 月には、情報基盤システムの更新を行い、新しいシステムが稼働いたしました。新システムでは、情報セキュリティ対策が強化され、また、無線 LAN やキャンパス間ネットワークなどネットワーク接続性能も向上いたしましたので、これまで以上に、利用者の皆様に安心して利用いただけることと存じます。

コロナ禍に伴って、遠隔講義・遠隔勤務等のニーズが高まり、本センターの重要性は今まで以上に高まっています。また、来年度からは新入学生のノートパソコン必携化が予定されており、情報リテラシー教育の重要性も増しています。総合情報メディアセンターでは皆様のお役に立てるよう、今後も様々な取り組みを行って参りますので、御支援と御理解を賜りますようお願い申し上げます。

センター長あいさつ

| | |
|----------------------------|-----------|
| 1. 部門概要・業績 | 1 |
| (1) 部門教職員..... | 1 |
| (2) 部門概要..... | 2 |
| (3) 教員活動実績..... | 7 |
| 2. 教育研究実績 | 12 |
| (1) 研究活動..... | 12 |
| (2) 学会発表等..... | 23 |
| 3. 教育活動及び教育支援 | 24 |
| (1) 教育活動..... | 24 |
| (2) 教育支援..... | 26 |
| 4. 研究活動 | 27 |
| (1) 研究成果..... | 27 |
| 5. 業務関連 | 32 |
| (1) 沿革..... | 32 |
| (2) 情報基盤システム..... | 33 |
| (3) 事業実績..... | 35 |
| (4) 利用状況..... | 36 |
| (5) センターイベント..... | 42 |
| (6) 各種委員会 | 42 |
| (7) センター規則..... | 43 |

1. 部門概要・業績

(1) 部門教職員(2019年3月現在)

【センター長(兼)】

教授：樋上 喜信

【情報基盤・セキュリティ部門】

教授：川原 稔

准教授：阿萬 裕久

助教(兼)：佐々木 隆志

【ICT利用教育・情報サービス推進部門】

教授(兼)：田中 寿郎

教授：中川 祐治

教授：野口 一人

助教：裏 和宏

【その他】

教育支援者：菊川 佳代

【研究支援部情報システム課】

課長

菊川 昭治

副課長

平高 哲也

総務チーム

TL(兼)：平高 哲也

事務補佐員：窪田 鮎子, 事務補佐員：深井 彩加

電子情報チーム

技術員：池住 元秀, 技術員：渡部 周平, 技術員：梅本 祥史

技術員：吉田 あきえ

情報基盤チーム

技術専門職員：宮内 譲嗣, 技術専門職員(重信)：中村 勝

1. 部門概要・業績

技術専門職員（樽味）：増田 隆司，技術員：近藤 智幸

(2) 部門概要

【情報基盤・セキュリティ部門(Division of Information Infrastructure and Security)】

情報基盤の運用・整備を実施し、さらに、CISO 及び CISO 補佐と協力して、EU-CSIRT（愛媛大学シーサート）を積極的に運営します。

令和元年度の主な活動は以下のとおりである。

1) 愛媛大学情報基盤システムの更新・運用管理

令和元年 9 月 1 日に情報基盤システムの更新を行った。情報基盤システムは、情報ネットワーク、情報システム、情報教育用 PC から構成されている。情報ネットワークに関しては、データセンターを核として愛媛大学の主要キャンパス（城北、重信、樽味、持田）を耐故障性が高められた冗長系 80Gbps 回線（40Gbps×2）で接続したコンピュータネットワーク（MAN）及びパブリックスペース等に配置した無線ネットワークで構成しており、高信頼性・高機能性を実現したものである。有線の情報ネットワークは、ファイアウォール及び IPS の機能を備えた L3 スイッチを中核にデータセンターに据え、主要キャンパスに配置した 426 台の L2 スイッチに基本 20Gbps（10Gbps×2）で接続するトポロジーを持つ構成である。無線のネットワークは、講義室や会議室などのパブリックスペースにアクセスポイント 610 台を配置して多人教授業への対応を行えるようにした。情報セキュリティの機能を強化するために、情報ネットワークを利用するには認証を必要とする機能を有しており、本運用中に全情報ネットワーク接続に対して認証を必須とする予定である。

情報システムに関しては、通常業務が安定的に行える仮想化統合環境をデータセンターに構築して安定的な運用が行えるようになっている。これには、学内向けの OS 及び Web のホスティングサービスを数百のレベルでサポートできる人的・機械的体制が含まれている。仮想化統合環境に蓄積されるデータは、東温市重信キャンパスに設置されたバックアップシステムに 20Gbps（10Gbps×2）の回線で接続し同期して保全している。情報システムを全て仮想化統合環境下で運用できることにより、耐障害性の高度化、無停止運用、事業継続計画（BCP）が可能となっている。

情報教育用 PC に関しては、愛媛大学全体の情報教育を行えるように、教育用 PC 合計 938 台が全学の演習室等に設置されている。教育用 PC では、医療データ等の表示を正確に読み取れる表示再現能力に重点を置いて導入している。

この情報基盤システムは、研究支援部情報システム課と共同して安定的な運用管理を行っている。情報基盤システムの保守作業を委託している業者とは情報基盤システム保守定例会「システム状況検討会」を開催し、情報ネットワーク及び情報システム（サーバ群、パソコン端末群）の障害対応や改善について指導的役割を果たした。教職員と業者との担当部分を明確にして、専門家がそれぞれの担当部分について運用管理・監視・障害対応が行える体制を構築して、安定した運用を行い続けている。運用管理の補助を行うために、総合情報メディアセンター事務課を中心に申請システムが開発され、セキュアゲートウェイ申請及びホスティングサービス申請向けのオンライン申請システムが運用されている。

1. 部門概要・業績

2) 情報セキュリティ対策

最高情報セキュリティ責任者（CISO）のもとに愛媛大学コンピュータセキュリティインシデント対策チーム（CSIRT）を平成28年度に構築して体制整備を行い、愛媛大学の情報セキュリティに関する対策及び技術的支援を行っている。平成30年5月に開設したCSIRTのホームページで、セキュリティ関連の情報発信を行っている。令和元年11月には、学外公開申請書が提出されている学内のサーバに対して情報セキュリティ対策脆弱性検査を実施し、脆弱性が発見されたサーバ管理者には検査結果を通知して、改善あるいは廃止等の対策勧告を行った。令和元年度中には、インシデント対応を126件行い、そのうち17件が不正アクセス等のインシデントであった。

3) ホスティングサービスの運用管理

情報基盤システムが更新されたことにより、学内への多くのホスティングサービスに対応できる環境が整備され正式運用を開始した。平成31年3月現在で、OSホスティング43件、Webホスティング78件がサービスされている。制度的にも整備を行い、研究活動や教育活動、さらには、地域連携や社会連携にも活用できるプラットフォームとして利用が可能となっている。部局等へのメールサービスについても、ホスティングサービスの一形態として再定義し、運用体制を整備している。

4) クラウドメールの運用管理

平成26年4月よりマイクロソフト社Office 365を用いて、愛媛大学アカウントを認証基盤とした全学クラウドメールを学生・教職員全員を対象として運用を開始した。Office 365に関しては、マイクロソフト社による仕様変更等によるトラブルに対しても、適宜対応を行い安定運用に努め続けている。

5) 遠隔拠点の整備

愛媛大学では、地域・社会連携等のため愛媛県内に多くの遠隔拠点を抱えている。遠隔拠点においては、主要キャンパスと変わらない情報ネットワーク環境を提供するため、総合情報メディアセンターではVPN(Virtual Private Network)による遠隔拠点への情報ネットワークを構築して供給している。現在、遠隔拠点用情報ネットワークは19地点で、遠隔拠点は新情報基盤システムの一部として機能しており、情報基盤システムとしての安定した運用管理体制となっている。

6) 総合情報メディアセンター第1部会（情報基盤・セキュリティ管理部会）

総合情報メディアセンター第1部会では、愛媛大学における情報ネットワークや情報システム等の情報基盤及び情報セキュリティ関連事項について、整備、立案、予算確保、構築、運用管理等あらゆる審議を行っている。基本的に、部会において情報基盤・セキュリティ関連事項について種々の検討を行い、決定事項について必要に応じて教員コア会議・センター会議への審議送り及び学長や役員会との調整作業を行っている。2019年度の部会は、第1回：4月11日、第2回：5月15日、第3回：6月19日、第4回：7月17日、第5回：8月21日、第6回：9月25日、第7回：10月10日、第8回：11月13日、第9回：12月11日、第10回：1月15日、第11回：2月19日に開催した。愛媛大学情報セキュリティ委員会に対する情報セキュリティ対応の役割も果たした。

1. 部門概要・業績

7) 愛媛大学情報セキュリティセミナーの開催

情報通信技術は導入しただけで終わりという訳ではなく、常に情報セキュリティに注意を払う必要があり、場合によっては、情報セキュリティの面から導入した情報システム等の更新を考える必要もあるため、令和元年9月20日(金)に教職員を対象にした「情報セキュリティセミナー」を開催した。国立情報学研究所教授高倉弘喜氏から「サイバー攻撃による被害発生を想定した運用継続手法」という演題で講演いただき、具体的な事例を交えて話があった。

【ICT利用教育・情報サービス推進部門(Division of Education using ICT and Information Service)】

ICT利活用教育の推進及び学内の情報サービスに対して技術的な充実のための助言・支援を行います。

令和元年度の主な活動は以下のとおりである。

1) ICT利用教育推進部会(第2部会)

ICT利用教育推進室会議(第2部会)を6回開催した。

第1回(4月24日)

1. 今年度の検討課題について

情報戦略マスタープランにあげられた以下4つのアクションに対するメリット・デメリットの検討を行ってきたが、第1部会(情報基盤・セキュリティ管理部会)で検討された運用課題とセキュリティリスクを取りまとめてセンター会議へ報告する。

(ア) PC必携化及び包括契約

セキュリティポリシーを学内システムのみではなく、クラウド等の学外システムにも対応可能なものに修正する必要がある。

(イ) 生涯メール(アカウント)

運用部局の選定や学内規定整備など解消すべき課題がある。

(ウ) G Suite for Education

導入依頼者へのヒアリングを行い、導入に向けた具体的なメリット・デメリットを抽出する。

(エ) SNS等の利活用

海外渡航者向けのSNSについて検討したが導入事例がなく、また海外でのサービスに対する懸念があり、導入依頼者を含めて検討する必要がある。

2. オープンアクセスに関する方針(案)について

5月末にNIIで開催される「Japan Open Science Summit 2019」へ参加し、得られた知見をもとに学内規定に反映させる。

第2回(6月13日)

1. オープンアクセスに関する方針(案)について下記の報告を受け、オープンアクセスに関して今後の本学における対応を検討する。

- ・「Japan Open Science Summit 2019」への参加報告

1. 部門概要・業績

- ・NII 学術情報基盤オープンフォーラム』学術機関における研究データ管理の進め方に関する報告

第3回（10月15日）

1. SNS等の利活用について

- ・国際連携推進機構からの海外渡航者向けのSNS利活用の検討

Microsoft Teamsの利用を可とし、第1部会へ提案することとした。

2. 「国立大学改革方針」を踏まえた文部科学省との対話用調書作成について

宇野理事から上記調書の内、「SINETを活用した知識集約型社会の実現」等について素案作成の依頼があった。

第4回（11月27日）

1. Moodle3.5への切り替えスケジュールについて

Moodle3.1から3.5への切り替えスケジュールを原案通り承認した。また、3.1については教員のみ利用できる状態で1年間並行して稼働する。

2. Moodleのアンケート機能について

アンケート機能に不具合があるため運用を停止し、フィードバック機能で代替する原案が示されたが、別の手段がないかサポート業者に問い合わせをし、次回の会議で決定することとした。

第5回（12月27日）メール会議

1. Moodleのアンケート機能について

従来より外部プラグインのアンケート機能に不具合があるため運用を停止することとした。今後は代替機能としてMoodleのフィードバック機能を利用する。

第6回（2月3日）

審議事項はなく、報告のみであった。

2) 情報リテラシー入門チーム会議

情報リテラシー入門チーム会議のリーダーとして以下の活動を行った。

4月6日にTA, SA研修会を実施した。

5月30日、7月25日、10月31日に情報リテラシー入門チーム会議を開催し、情報リテラシー入門科目の講義内容の検討及び教材の作成と授業実施を検討した。第1回目では、担当予定教員の決定を行った。第2回目では、講義担当者の交代と、同一フロア連結について議論した。第3回目ではメディアセンターシステム更新の変更に伴って教科書の改定を行うため執筆の担当を決定し、「情報リテラシー入門2020年版」の作成を行った。

3) まつやまデータ利活用研究協議会の充実

- ・まつやまデータ利活用研究協議会総会を5月31日に開催し、2018年11月末に設置された各WG活動の総括を行った。

- ・WGへの大学からの参加：

数学セミナーIIを受講した7名の学生と、卒業研究生5名、さらに大学院生3名の計15名がワーキンググループに参加し、特に富士通WGでは松山市から提供された補助金に関する実データを解析し、報告を行った。

1. 部門概要・業績

・WG に関連する地元 IT 企業の参画を推進：

これに関しては企業向けデータ利活用の普及と研修（リカレント教育）で述べる。

・HPC システムの利用 2018 年度及び 2019 年度に導入した HPC システムの教育利用方法の検討：

2 年間に渡って、学長特別強化経費を用いて 2 台のハイパフォーマンスコンピュータを導入した。1 台目は大学院生の研究や卒業研究に利用され成果を上げることが出来た。2 台目は年度末に導入されたので、今年度 2 台それぞれの利用方法について検討する。

・ワーキンググループの活動：

富士通 WG は 8 月 1 日、11 月 1 日、11 月 28 日、1 月 17 日、2 月 13 日の計 5 回開催された。

日立 WG は 5 月 15 日、7 月 30 日、9 月 2 日、1 月 7 日の計 4 回開催された。

NECWG は 5 月 7 日、6 月 18 日、9 月 20 日の計 3 回開催され、さらに 8 月 2 日に愛媛大学構内において人流測定の予備実験を行い、2 月 22 日から 26 日の 5 日間に渡って「坂の上の雲ミュージアム」の入場者に対する人流測定を行った。

4) 愛媛県ネットワーク防犯連絡協議会での貢献

愛媛県警よりネットワーク上で犯罪の可能性を調査する「サイバーパトローラー」を引き続き学生に委嘱したいとの依頼を受けて、本学より 8 名の学生（大学院生および学部生）を選抜し、7 月 31 日に愛媛県警察本部において委嘱式が執り行われた。サイバーパトローラーとして委嘱された学生は県警のサイバー犯罪対策室と連携して調査及び情報収集に当たった。

5) 「キャンパス IT 授業 2019」の実施

9 月 9 日（月）13:00 から 16:00 に総合情報メディアセンターにおいて、附属高校の「グローバル・エデュケーション（伊豫学）」の授業として「キャンパス IT 授業 2019」を実施した。講義は「Processing をはじめよう」（担当：中川）、「インターネットの中身を覗いてみよう」（担当：野口）、「測ってツイート！センサーネットワークに挑戦」（担当：佐々木）の 3 つを並行してそれぞれ 2 回実施した。

6) 企業向けデータ利活用の普及と研修

企業データの解析でもっとも重要なのは、経営者の意識改革と、実際のデータに接する若手社員の育成である。本取組でのリカレント教育では若手社員の育成が主眼であるが、実データを解析するには上層部（経営者）の理解が不可欠であり、そのためには成功事例を見せることが重要である。そこで、データサイエンティスト協会等のセミナーに参加し、企業でのデータ利活用成功事例の情報収集を行い、この情報をもとに講師を招いてセミナーを実施する。1 月 23 日に日本電気 AI・アナリティクス事業部データサイエンス部から伊豆倉さやか氏を講師として招き「データ利活用セミナー」（データサイエンティストの仕事）を開催した。参加者は 32 名であった。

(3) 教員活動実績



中川 祐治

NAKAGAWA Yuji

<職名> : 教授

<生年月日> : 1957年12月14日

<電話> : 089-927-9569

<E-mail> : nakagawa.yuji.mk@ehime-u.ac.jp

<職歴> :

○(株)富士通研究所情報処理研究部門パターン研究部
研究員 (1986年4月～1989年12月)

○鹿児島大学助教授 (1990年1月～1990年3月)

○鹿児島大学情報処理センター主任/助教授 (1990年
4月～1993年3月)

○国際基督教大学助教授 (1993年4月～1995年3月)

○国際基督教大学準教授 (1995年4～1996年6月)

○愛媛大学教授 (1996年7月)

<学歴> : 東京都立大学大学院理学研究科博士課程修
了

<学位> : 1986年理学博士 (東京都立大学)

<免許・資格> :

○(公)日本シェアリングネイチャー協会認定「ネイチ
ャーゲームリーダー」(1999年8月)

○NPO 法人自然体験活動推進協議会認定「自然体験活
動リーダー」(2003年4月)

<所属学会> : 人工知能学会, 情報処理学会, 電子
情報通信学会, 日本データベース学会, ACM, コンピ
ュータ利用教育学会, 高エネルギー物理学研究者会議,
日本環境教育学会, 日本環境教育フォーラム

<専門分野> : 情報認識学, 高エネルギー物理学,
環境教育

<研究課題> : 画像認識・理解の研究, 遠隔教育シ
ステムの研究, 環境教育と情報認識学の融合

<部局内貢献> :

○ ICT 利用教育推進室室長 (2018年4月～)

○ 第2部会 (ICT 利用教育推進部会) 部会長 (2018年
4月～)

○ 総合情報メディアセンター会議委員 (2011年4月
～)

<学外審議会・委員会活動> :

○ 愛媛県ネットワーク防犯連絡協議会顧問 (2007年
12月～)

<調査・研究会等への貢献> :

○ まつやまデータ利活用研究協議会運営委員長 (2018
年11月～)

○ 愛媛県法人会連合会 結婚支援ビッグデータ・オー
プンデータ活用研究会委員 (2017年8月～2020年3
月)

<講演実績> :

○ 愛媛大学地域創生イノベーター育成プログラム「デ
ータサイエンスによる問題解決」, 愛媛県 (2019年10
月26日)

○ 「Processing をはじめよう」, キャンパス IT 体験
会 2019, 愛媛県 (2019年9月9日)

<地域啓発活動・教育機関支援活動> :

○ Code for DOGO 代表 (2015年3月～)

○ 愛媛県シェアリングネイチャー協会副理事長 (2017
年4月～)

<ボランティア活動> :

○ 愛媛県シェアリングネイチャー協会道後シェアリン
グネイチャーの会運営委員長 (2007年1月～)



野口 一人

NOGUCHI Kazuto

<職名> : 教授

<電話> : 089-927-8802

<FAX> : 089-927-8805

<E-mail> : noguchi.kazuto.mx@ehime-u.ac.jp

<職歴> :

○日本電信電話株式会社フォトニクス研究所・他 勤務 (1986年4月～2011年6月)

○愛媛大学教授 (2011年7月)

<学歴> : 早稲田大学大学院理学研究科修士課程修了

<学位> : 2001年博士 (工学) (早稲田大学)

<免許・資格> : 第一種衛生管理者, 有機溶剤作業主任者, 特定化学物質等作業主任者, レーザ機器取扱技術者 (第1種), 特定高圧ガス取扱主任者

<所属学会> : 電子情報通信学会, 応用物理学会, IEEE, 遠隔医療学会

<専門分野> : 光デバイス, 光波長多重通信, 光通信システム

<研究課題> : 光・情報ネットワークの高度化, 医療 ICT

<部局内貢献> :

○総合情報メディアセンター会議委員 (2011年7月～)

○情報資源・セキュリティ管理部会委員 (2011年7月～)

○安全衛生委員・安全衛生管理委任者 (2013年1月～)

○eラーニング推進部会委員 (2016年4月～)

<調査・研究会等への貢献> :

○大学プログラミングオープンチャレンジ (EPOCH@まつやま) 実行委員 (2011年)

○第73回応用物理学会学術講演会 現地実行委員 (2012年9月)

○電子情報通信学会 ネットワークシステム研究会・無線ネットワークシステム研究会 現地世話人 (2012年12月)

○電子情報通信学会 光通信システム研究会 現地世話人 (2013年1月)

○日本胎児心臓病学会 日本胎児遠隔医療研究会幹事 (2013年2月～)

○えひめ IT フェア 2013 (2013年6月)

○電子情報通信学会 ヒューマンコミュニケーショングループ研究会 現地世話人 (2013年12月)

○IEEE 四国支部 Vice Chair (2017年1月～)

○セキュリティシンポジウム道後ライブ配信 (2018年3月)

○IEEE 四国支部 Chair (2019年1月～)

<講演実績> :

○「現代社会と情報教育」, 平成30年度愛媛大学教員免許更新講習, 愛媛県 (2018年9月8日)

○「インターネットの中身を覗いてみよう」, キャンパス IT 体験会 2019, 愛媛県 (2019年9月9日)



川原 稔
KAWAHARA Minoru

<職名> : 教授
<電話> : 089-927-9097
<FAX> : 089-927-8805

<E-mail> : kawahara@ehime-u.ac.jp

<職歴> :

- 京都大学助手 (1990年4月～2004年2月)
- 愛媛大学助教授 (2004年3月～2007年3月)
- 愛媛大学准教授 (2007年4月～2013年1月)
- 愛媛大学教授 (2013年2月)

<学歴> : 京都大学大学院工学研究科応用システム科学専攻修士課程修了

<学位> : 2003年博士 (情報学) (京都大学)

<所属学会> : 電子情報通信学会, 情報処理学会

<専門分野> : 情報通信システム, 知能情報学, 情報保障, 医療情報学, オペレーションズリサーチ

<研究課題> :

- オーバーレイネットワークを基盤とした自律協調分

散システムに関する研究

○情報ネットワークを基盤としたロケーションアウェアに関する研究

○視覚情報保障の情報通信技術応用に関する研究

○情報通信技術による視覚特性の計測に関する研究

○数理モデルを用いた地域連携・産学連携問題解決法に関する研究

<部局内貢献> :

○総合情報メディアセンター会議委員 (2011年4月～)

○第1部会 (情報基盤・セキュリティ管理部会) 部長 (2018年度～)

○システム状況検討会 (情報基盤システム保守定例会) 議長 (2011年4月～)

○愛媛大学最高情報セキュリティアドバイザー (2012年9月～)

○情報セキュリティ専門委員会委員長 (2012年9月～)

○情報セキュリティ委員会委員 (2012年9月～)

○CSIRT (情報セキュリティ対策チーム) (2016年度～)



阿萬裕久
AMAN Hirohisa

<生年月日> :
1973年8月8日

<職名> : 准教授

<電話> : 089-927-8981

<FAX> : 089-927-8805

<E-mail> : aman@ehime-u.ac.jp

<職歴> :

- 愛媛大学工学部助手 (2001年4月～2005年3月)
- 愛媛大学工学部特任講師 (2005年4月～2006年3月)
- 愛媛大学大学院理工学研究科特任講師 (2006年4月～2007年3月)
- 愛媛大学大学院理工学研究科講師 (2007年4月～2013年9月)
- 愛媛大学総合情報メディアセンター准教授 (2013年

10月～)

<学歴> : 九州工業大学大学院工学研究科博士後期課程修了

<学位> : 2001年 博士 (工学) (九州工業大学)

<免許・資格> : 第一種衛生管理者

<所属学会> : 情報処理学会, 電子情報通信学会, 日本ソフトウェア科学会, 日本知能情報ファジィ学会, 米国電気電子学会 (IEEE)

<専門分野> : ソフトウェア工学

<研究課題> :

○ソフトウェア品質に関する定量的尺度の研究

○ソフトウェアの効率的な品質向上に向けた数理モデルの活用に関する研究

○ソフトウェア開発活動に対する品質マネジメントの実践に関する研究

<部局内貢献> :

○総合情報メディアセンター会議委員 (2013年10月

1. 部門概要・業績

～)

○第1部会(情報基盤・セキュリティ管理部会)委員
(2018年度～)

○情報セキュリティ専門委員会委員(2014年4月～)

○修学支援システム検討専門委員(2015年9月～2016年2月)

○CSIRT(情報セキュリティ対策チーム)(2016年度～)

<学外審議会・委員会貢献>:

○日本ソフトウェア科学会学会誌編集委員(2013年4月～)

○電子情報通信学会知能ソフトウェア工学研究会 専門委員(2003年5月～)

○情報処理学会ソフトウェア工学研究会 運営委員
(2006年5月～2017年3月)

○情報処理学会論文誌ソフトウェア工学特集号編集委員
(2015年2月～)

○日本ソフトウェア科学会 ソフトウェア工学の基礎
ワークショップ FOSE プログラム委員(2009年度～)

○松山市農地台帳システム再構築事業業務委託総合評価委員
(2015年4月～2015年7月)

○The 4th International Conference on Big Data,

Cloud Computing, and Data Science (BCD2019) プログラム委員

○The 14th Workshop on Testing: Academia-Industry Collaboration, Practice and Research Techniques (TAIC PART 2019) プログラム委員

○独立行政法人大学入試センター教科科目第一委員会委員(情報関係基礎問題作成部会)(2014年4月～2016年3月)

○愛媛医療センター附属看護学校非常勤講師(2019年4月～)

○四国医療技術専門学校 非常勤講師(2006年10月～)

○国立情報学研究所 トップエスイー 講師(2008年4月～2016年3月)

<講演実績>:

○招待講演「ソフトウェアメトリクスについて知っておきたいこと」(ソフトウェアテストシンポジウム2014 in 四国, 2014年11月14日)

○招待講演「メトリクス研究の一展開: 人に依存するファクタの影響について」(ソフトウェア信頼性研究会第11回ワークショップ, 2015年11月14日)



佐々木 隆志

SASAKI Takashi

<生年月日>:

1974年3月16日

<職名>: 助教(兼)

<電話>: 089-927-8354

<FAX>: 089-927-8805

<E-mail>: sasaki@cite.ehime-u.ac.jp

<職歴>:

○京都科学技術専門学校(京都府京都市) 非常勤講師
(2001年4月～2003年3月)

○京都コンピュータ学院(京都府京都市) 非常勤講師
(2004年4月～2005年3月)

○国立国会図書館関西館(京都府精華町) 非常勤調査員
(2004年6月～2007年2月)

○京都大学大学院情報学研究科産学官連携研究員

(2004年10月～2005年3月)

○奈良産業大学(奈良県生駒郡) 情報学部非常勤講師
(2005年4月～2007年2月)

○京都大学大学院情報学研究科産学官連携研究員
(2005年12月～2006年3月)

○京都大学大学院情報学研究科産学官連携研究員
(2006年12月～2007年2月)

○愛媛大学総合情報メディアセンター助手(2007年2月)

○愛媛大学経営情報分析室助教(2013年10月)

<学歴>:

○京都大学理学部卒業(物理学専攻)(1998年3月)

○奈良先端科学技術大学院大学情報学研究科博士前期課程修了(2000年3月)

○京都大学大学院情報学研究科博士後期課程単位取得退学(2004年3月)

<学位>: 2000年修士(工学)(奈良先端科学技術大

1. 部門概要・業績

学院大学)

<所属学会>：情報処理学会, IEEE, Information Processing Society of Japan, アメリカ計算機学会

<専門分野>：情報ネットワーク, 自律分散協調型システム, モバイルコンピューティング, e-Learning

<研究課題>：

○e-Learning システムのデザインと効果分析

○自律分散ネットワーク

○大規模分散ストレージ及びデジタルアーカイブ

○自律分散音響測位システム

<部局内貢献>

○EPOCH@まつやま実行委員 (2007 年度～)

○第1部会 (情報基盤・セキュリティ管理部会) 委員 (2018 年度～)

○eラーニング推進検討ワーキンググループ (2009 年度～)

○CSIRT(情報セキュリティ対策チーム) (2016年度～)

<学外審議会・委員会活動>：

○e-Knowledge コンソーシアム四国企画委員

○システム専門委員 (2008 年～)

○eまつやま最先端技術研究会理事 (2010 年度～)

○情報処理学会四国支部評議員 (2010 年度～)

○Treasurer of IEEE Shikoku Section (2011 年～)

○国立国会図書館デジタルアーカイブシステム技術審査委員

○日本 Android の会四国支部

○愛媛情報セキュリティ研究会 (通称セキュリティみかん)

○オープンセミナー愛媛実行委員

○オープンソースカンファレンス愛媛実行委員

○情報セキュリティシンポジウム道後実行委員

○Code for DOGO 委員 (2015 年 3 月～)



裏 和宏

URA Kazuhiro

<生年月日>：

1988 年 8 月 16 日

<職名>：助教

<電話>：089-927-8801

<FAX>：089-927-8805

<E-mail>：ura.kazuhiro.xe@ehime-u.ac.jp

<職歴>：

○香川大学総合情報センター技術補佐員 (2013 年 4 月～2018 年 3 月)

○愛媛大学総合情報メディアセンター助教 (2018 年 5 月)

<学歴>：

○香川大学工学部信頼性情報システム工学科卒業 (2011 年 3 月)

○香川大学大学院工学研究科信頼性情報システム工学専攻博士前期課程修了 (2013 年 3 月)

<学位>：2013 年 修士 (工学) (香川大学)

<専門分野>：e-Learning, 教育工学

<研究課題>：

○学生の思考過程や理解度の分析

○教育の最適化

○e-Learning の組織的運用

<部局内貢献>：

○ICT 利用教育推進部会 (第2部会) 委員 (2018 年 5 月～)

○大学連携 e-Learning 教育支援センター四国 愛媛大学分室 分室教員 (2018 年 5 月～)

○ICT 利用教育推進室 室員 (2018 年 5 月～)

○共通教育センター企画専門部会 陪席員 (2018 年 5 月～)

○情報リテラシー入門チーム チームメンバー (2018 年 6 月～)

<学外審議会・委員会活動>：

○大学連携 e-Learning 教育支援センター四国 企画委員 (2018 年 5 月～)

2. 教育研究実績

(1) 研究活動

【著書】

中川 祐治

○「情報リテラシー入門 2020 年版」, 中川祐治ほか, 全体取りまとめ及び分担執筆 第 5 章 情報とデータ, 日経 BP 社, 2020 年 3 月.

野口 一人

○情報リテラシー入門 2020 年版」, 野口一人, 分担執筆 第 9 章 情報利活用: プレゼンテーション, 2020 年 3 月.

阿萬 裕久

○「ソフトウェア工学」, 阿萬裕久, 分担執筆 第 11 章 ソフトウェアのテスト技術, 第 12 章 ソフトウェアの品質と定量的尺度, 2019 年 3 月.

○「例題で学ぶ C による数値計算プログラミング」, 分担執筆 第 1 章 連立 1 次方程式と行列, 第 5 章 微分方程式, 2019 年 4 月.

裏 和宏

○「情報リテラシー入門 2020 年版」, 裏和宏, 分担執筆 第 1 章 パソコンの基本操作, 2020 年 3 月.

【論文 (過去 5 年間)】

中川 祐治

紀要・抄録

○CNN を用いた変体仮名認識手法, 新納裕貴・中川祐治, 令和元年度電気関係学会四国支部連合大会論文集, 13-1, 2019.

○セマンティックセグメンテーションによる黒目領域推定, 徳永眞哉・中川祐治, 令和元年度電気関係学会四国支部連合大会論文集, 13-28, 2019.

○男女別 IPMR を用いた合計特殊出生率低下の要因推測, 伊藤 佑一・中川祐治, 令和元年度電気関係学会四国支部連合大会論文集, 17-20, 2019.

○合計特殊出生率低下を探索する尺度の算出手法の開発, 伊藤佑一・中川祐治, 平成 30 年度電気関係学会四国支部連合大会論文集, 17-1, 2018.

○機械学習による受講者観察システム高速化の検討, 徳永眞哉・中川祐治, 平成 30 年度電気関係学会四国支部連合大会論文集, 13-20, 2018.

○機械学習を用いた島ナビの一検討, 新納裕貴・中川祐治, 平成 30 年度電気関係学会四国支部連合大会論文集, 13-21, 2018.

○黒目中心座標の高速検出と Saccade の検出頻度, 佐々木良・中川祐治, 平成 27 年度電気関係学会四国支部連合大会論文集, pp. 193, 2015.

○画像認識による玉葱頭部の判別, 吉本祐真・中川祐治, 平成 27 年度電気関係学会四国支部連合大会論文集, pp. 194, 2015.

2. 教育研究実績

野口 一人

紀要・抄録・報告

○学術ネットワークを使った胎児心エコー遠隔セミナーの取り組み, 野口一人, 愛媛ジャーナル, 第31巻, 第10号, pp. 77-79, 2018.

○学術ネットワーク(SINET)を使った胎児心エコーセミナーの報告, 川瀧元良・清水周次・安德恭彰・工藤孔梨子・波々伯部佳子・野口一人, 魚瀬尚朗, 日本遠隔医療学会雑誌, 第11巻, 第2号, pp. 84-87, 2015.

川原 稔

原著論文

○A Survival Analysis-Based Prioritization of Code Checker Warning: A Case Study Using PMD, Hirohisa Aman・Sousuke Amasaki・Tomoyuki Yokogawa・Minoru Kawahara, Big Data, Cloud Computing, and Data Science Engineering. Studies in Computational Intelligence, vol. 844, pp. 69-83, 2020.

○他の開発者向けに構築された個人化バグ予測モデルの活用に関する提案, 宮本敦哉・阿萬裕久・川原稔, ソフトウェア工学の基礎 XXVI, pp. 3-12, 近代科学社, 2019.

○データ依存関係に着目したフォールト混入リスク評価メトリクスの提案, 川上卓也・阿萬裕久・川原稔, コンピュータソフトウェア, Vol. 36, No. 4, pp. 32-38, 2019.

○フォールト混入のリスク評価に向けたソースコード変更メトリクスの提案, 川上卓也・阿萬裕久・川原稔, ソフトウェア工学の基礎 XXV, pp. 47-52, 近代科学社, 2018.

○決定木を利用した Java メソッドの名前と実装の間の適合性判定モデルとその評価, 鈴木翔・阿萬裕久・川原稔, コンピュータソフトウェア, Vol. 35, No. 4, pp. 115-121, 2018.

○A Quantitative Analysis on Relationship between an Early-Closed Bug and Its Amount of Clues: A Case Study of Apache Ant, Akito Sunouchi・Hirohisa Aman・Minoru Kawahara, IEICE Transactions on Information and Systems, vol. E101-D, no. 10, pp. 2523-2525, 2018.

○An Entropy-Based Metric of Developer Contribution in Open Source Development and Its Application to Fault-Prone Program Analysis, Kazuki Yamauchi・Hirohisa Aman・Minoru Kawahara, International Journal of Networked and Distributed Computing, vol. 6, no. 3, pp. 118-132, 2018.

○An Evaluation of Coding Violation Focusing on Change History and Authorship of Source File, Aji Ery Burhandenny・Hirohisa Aman・Minoru Kawahara, International Journal of Networked and Distributed Computing, vol. 5, no. 4, pp. 211-220, 2017.

○Change-Prone Java Method Prediction by Focusing on Individual Differences in Comment Density, Aji Ery Burhandenny・Hirohisa Aman・Minoru Kawahara, IEICE Transactions on Information and Systems, vol. E100-D, no. 5, pp. 1128-1131, 2017.

○決定木を用いた Java メソッドの名前と実装の適合性評価法の提案, 鈴木翔・阿萬裕久・川原稔, ソフトウェア工学の基礎 XXIV, pp. 63-72, 近代科学社, 2017.

○Lines of Comments as a Noteworthy Metric for Analyzing Fault-Proneness in Methods, Hirohisa Aman・Sousuke Amasaki・Takashi Sasaki・Minoru Kawahara, IEICE Transactions on Information and Systems, Vol. E98-D, No. 12, pp. 2218-2228, 2015.

○変数名とスコープの長さ及びコメントに着目したフォールト潜在性に関する定量的調査, 阿萬裕久・天寄聡介・佐々木隆志・川原稔, ソフトウェアエンジニアリングシンポジウム 2015 論文集, pp. 69-76, 2015.

国際学会発表論文

2. 教育研究実績

- Empirical Study of Fault Introduction Focusing on the Similarity among Local Variable Names, Hirohisa Aman • Sousuke Amasaki • Tomoyuki Yokogawa • Minoru Kawahara, Proc. 7th International Workshop on Quantitative Approaches to Software Quality, pp.3-11, 2019.
- Scalable Laplacian Regularized Least Squares Classification on Anchor Graph, Shozo Saeki • Minoru Kawahara • Hirohisa Aman, Proc. 2019 IEEE/ACIS 4th International Conference on Big Data, Cloud Computing, Data Science & Engineering, pp.71-76, 2019.
- A Doc2Vec-Based Assessment of Comments and Its Application to Change-Prone Method Analysis, Hirohisa Aman • Sousuke Amasaki • Tomoyuki Yokogawa • Minoru Kawahara, Proc. 25th Asia-Pacific Software Engineering Conference (APSEC2018), pp.643-647, 2018.
- Fault-Prone Java Method Analysis Focusing on Pair of Local Variables with Confusing Names, Keiichiro Tashima • Hirohisa Aman • Sousuke Amasaki • Tomoyuki Yokogawa • Minoru Kawahara, Proc. 2017 44th Euromicro Conference on Software Engineering and Advanced Applications (SEAA2018), pp.154-158, 2018.
- Empirical Analysis of Coding Standard Violation Focusing on Its Coverage and Importance, Aji Ery Burhandenny • Hirohisa Aman • Minoru Kawahara, Proc. 2018 IEEE 42nd Annual Computer Software and Applications Conference (COMPSAC2018), pp.837-838, 2018.
- Fault-Prone Source File Analysis Focusing on the Contribution Entropy in Open Source Development, Kazuki Yamauchi • Hirohisa Aman • Sousuke Amasaki • Tomoyuki Yokogawa • Minoru Kawahara, Proc. 2018 IEEE/ACIS 3rd International Conference on Big Data, Cloud Computing, Data Science & Engineering (BCD2018), pp.7-14, 2018.
- A Topic Model and Test History-Based Test Case Recommendation Method for Regression Testing, Hirohisa Aman • Takashi Nakano • Hideto Ogasawara • Minoru Kawahara, Proc. 2018 IEEE International Conference on Software Testing, Verification and Validation Workshops, pp.302-397, 2018.
- A Survival Analysis of Source Files Modified by New Developers, Hirohisa Aman • Sousuke Amasaki • Tomoyuki Yokogawa • Minoru Kawahara, M. Felderer, D. M. Fernández, B. Turhan, M. Kalinowski, F. Sarro, D. Winkler (Eds.) Product-Focused Software Process Improvement, Lecture Notes in Computer Science, vol. 10611, pp.80-88, Springer, 2017.
- Empirical Study of Abnormalities in Local Variables of Change-Prone Java Methods, Hirohisa Aman • Sousuke Amasaki • Tomoyuki Yokogawa • Minoru Kawahara, Proc. 2017 IEEE 28th International Symposium on Software Reliability Engineering Workshops, pp.214-221, 2017.
- Empirical Analysis of Words in Comments Written for Java Methods, Hirohisa Aman • Sousuke Amasaki • Tomoyuki Yokogawa • Minoru Kawahara, Proc. 2017 43rd Euromicro Conference on Software Engineering and Advanced Applications (SEAA2017), pp.375-379, 2017.
- An Application of the PageRank Algorithm to Commit Evaluation on Git Repository, Sho Suzuki • Hirohisa Aman • Sousuke Amasaki • Tomoyuki Yokogawa • Minoru Kawahara, Proc. 2017 43rd Euromicro Conference on Software Engineering and Advanced Applications (SEAA2017), pp.380-383, 2017.
- Empirical Study of Fault-Prone Method's Name and Implementation: Analysis on Three Prefixes---Get, Set and Be, Sho Suzuki • Hirohisa Aman • Minoru Kawahara, Proc. 2nd International Conference on Big Data, Cloud Computing, Data Science & Engineering (BCD 2017), pp.266-271, 2017.
- Investigation of Coding Violations Focusing on Authorships of Source Files, Aji Ery Burhandenny • Hirohisa Aman • Minoru Kawahara, Proc. 2nd International Conference on Big Data, Cloud Computing, Data Science &

2. 教育研究実績

Engineering (BCD 2017), pp.254-259, 2017.

○A Health Index of Open Source Projects Focusing on Pareto Distribution of Developer's Contribution, Hirohisa Aman · Aji Ery Burhandenny · Sousuke Amasaki · Tomoyuki Yokogawa · Minoru Kawahara, Proc. IEEE 8th International Workshop on Empirical Software Engineering in Practice (IWESEP2017), pp.29-34, 2017.

○A Test Case Recommendation Method Based on Morphological Analysis, Clustering and the Mahalanobis-Taguchi Method, Hirohisa Aman · Takashi Nakano · Hideto Ogasawara · Minoru Kawahara, Proc. 10th IEEE International Conference on Software Testing, Verification and Validation Workshops, pp.29-35, 2017.

○A Health Index of Open Source Projects Focusing on Pareto Distribution of Developer's Contribution, Hirohisa Aman · Aji Ery Burhandenny · Sousuke Amasaki · Tomoyuki Yokogawa · Minoru Kawahara, Proc. IEEE 8th International Workshop on Empirical Software Engineering in Practice (IWESEP2017), pp.29-34, 2017.

○A Test Case Recommendation Method Based on Morphological Analysis, Clustering and the Mahalanobis-Taguchi Method, Hirohisa Aman · Takashi Nakano · Hideto Ogasawara · Minoru Kawahara, Proc. 10th IEEE International Conference on Software Testing, Verification and Validation Workshops, pp.29-35, 2017.

○Examination of Coding Violations Focusing on Their Change Patterns over Releases, Aji Ery Burhandenny · Hirohisa Aman · Minoru Kawahara, Proc. 23rd Asia-Pacific Software Engineering Conference (APSEC 2016), pp.121-128, 2016.

○Local Variables with Compound Names and Comments as Signs of Fault-Prone Java Methods, Hirohisa Aman · Sousuke Amasaki · Tomoyuki Yokogawa · Minoru Kawahara, Joint Proc. the 4th International Workshop on Quantitative Approaches to Software Quality (QuASoQ2016) and 1st International Workshop on Technical Debt Analytics (TDA 2016), pp.4-11, 2016.

○Application of Mahalanobis-Taguchi Method and 0-1 Programming Method to Cost-Effective Regression Testing, Hirohisa Aman · Yuta Tanaka · Takashi Nakano · Hideto Ogasawara · Minoru Kawahara, Proc. 2016 42nd Euromicro Conference on Software Engineering and Advanced Applications (SEAA2016), pp.240-244, 2016.

○Empirical Study of Change-Prone and Fault-Prone Method Prediction Focusing on Comment Ownership, Aji Ery Burhandenny · Takashi Nakano · Hirohisa Aman · Minoru Kawahara, Proc. 2016 International Conference on Business and Information (BAI2016), vol.8, pp.219-230, 2016.

○Empirical Analysis of Change-Proneness in Methods Having Local Variables with Long Names and Comments, Hirohisa Aman · Sousuke Amasaki · Takashi Sasaki · Minoru Kawahara, Proc. 9th ACM/IEEE International Symposium on Empirical Software Engineering and Measurement (ESEM2015), pp.50-53, 2015.

○Predicting Fault-Prone Methods Focusing on the Combination of Inner Comments and Documentation Comments, Hirohisa Aman · Sousuke Amasaki · Takashi Sasaki · Minoru Kawahara, Proc. Work in Progress Session held in connection with SEAA2015 and DSS 2015, pp.3-4, 2015.

紀要・抄録・報告

○変数に着目した変更メトリクスの有効性について ～フォールト混入予測精度の比較実験～, 川上卓也・阿萬裕久・川原稔, 電子情報通信学会技術研究報告, vol.119, no.246, SS2019-22, pp.53-58, 2019.

○バグ票の類似度に基づいたバグ位置推定手法の改善に向けた提案 ～TraceScore 値の分配に関する比較実験～, 安里昌真・阿萬裕久・川原稔, 電子情報通信学会技術研究報告, vol.119, no.112, SS2019-4, pp.99-104, 2019.

○トピックの変化量に着目したソースコードの変更量分析に関する考察, 矢野博暉・阿萬裕久・川原稔, 情報処理学会ソフトウェア工学研究報告, vol.2018-SE-198, no.30, pp.1-8, 2018.

○Java ソースファイルの開発者数とバグ修正の起こりやすさに関する調査 ～ソースファイル間の依存関係に着

2. 教育研究実績

- 目した解析～, 山内一輝・阿萬裕久・川原稔, 電子情報通信学会技術研究報告, vol. 117, no. 136, pp. 67-72, 2017.
- バグ予測に向けた Java メソッドの名前と実装の特徴の関係に関する考察, 鈴木翔・阿萬裕久・川原稔, 電子情報通信学会技術研究報告, vol. 116, no. 512, pp. 25-30, 2017.
- バグ予測に向けた Java メソッドの名前と実装の特徴の関係に関する考察, 鈴木翔・阿萬裕久・川原稔, 電子情報通信学会技術研究報告, vol. 116, no. 512, pp. 25-30, 2017.
- メソッド名の先頭単語とソースコードの安定性の関係に関する考察, 鈴木翔・阿萬裕久・川原稔, ソフトウェア工学の基礎 XXIII, pp. 247-248, 近代科学社, 2016.
- 一人で開発・保守が行われているソースファイルの品質について, 山内一輝・阿萬裕久・川原稔, ソフトウェア工学の基礎 XXIII, pp. 251-252, 近代科学社, 2016.
- ソースコードの変更予測に向けたメソッド名の先頭単語に関する定量的調査, 鈴木翔・阿萬裕久・川原稔, 情報処理学会ソフトウェア工学研究報告, vol. 2016-SE-194, no. 6, pp. 1-8, 2016.
- コード行数に基づいた開発者の貢献度とそのエントロピーを用いた OSS プロジェクトの分析, 山内一輝・阿萬裕久・川原稔, 電子情報通信学会技術研究報告 vol. 116, no. 127, pp. 131-136, 2016.
- メソッド名の長さや構成に着目したソースコード品質に関する定量的調査, 鈴木翔・阿萬裕久・川原稔, 電子情報通信学会技術研究報告 vol. 116, no. 127, pp. 137-142, 2016.
- オープンソース開発における開発者の貢献度とソースコード品質の関係について, 山内一輝・阿萬裕久・川原稔, 情報処理学会ウインターワークショップ 2016・イン・逗子 論文集, pp. 41-42, 2016.
- プログラム依存グラフ上での命令間の距離に着目した凝集度メトリクスの提案とバグ予測への応用, 加藤健太・阿萬裕久・川原稔, 電子情報通信学会技術研究報告, vol. 115, no. 421, pp. 1-6, 2016.
- 共変更の新しいさと開発者の貢献度合いに着目したロジカルカップリングの評価---ソースコード修正漏れの自動検出に向けて---, 尾田祐之介・阿萬裕久・川原稔, 情報処理学会研究報告ソフトウェア工学, Vol. 2015-SE-190, No. 17, pp. 1-8, 2015.
- 開発者の違いを考慮したコメント記述量の評価とバグ予測への応用, 中野貴史・阿萬裕久・川原稔, ソフトウェア信頼性研究会 第 11 回ワークショップ論文集, オンライン, 2015.
- オープンソース開発における開発者ごとでのコメント記述の傾向に関する調査, 中野貴史・佐々木隆志・川原稔・阿萬裕久, 電子情報通信学会技術研究報告, Vol. 115, No. 153, pp. 125-130, 2015.

阿萬 裕久

原著論文

- A Survival Analysis-Based Prioritization of Code Checker Warning: A Case Study Using PMD, Hirohisa Aman・Sousuke Amasaki・Tomoyuki Yokogawa・Minoru Kawahara, Big Data, Cloud Computing, and Data Science Engineering. Studies in Computational Intelligence, vol. 844, pp. 69-83, 2020.
- 他の開発者向けに構築された個人化バグ予測モデルの活用に関する提案, 宮本敦哉・阿萬裕久・川原稔, ソフトウェア工学の基礎 XXVI, pp. 3-12, 近代科学社, 2019.
- データ依存関係に着目したフォールト混入リスク評価メトリクスの提案, 川上卓也・阿萬裕久・川原稔, コンピュータソフトウェア, Vol. 36, No. 4, pp. 32-38, 2019.
- フォールト混入のリスク評価に向けたソースコード変更メトリクスの提案, 川上卓也・阿萬裕久・川原稔, ソフトウェア工学の基礎 XXV, pp. 47-52, 近代科学社, 2018.
- 決定木を利用した Java メソッドの名前と実装の間の適合性判定モデルとその評価, 鈴木翔・阿萬裕久・川原稔, コンピュータソフトウェア, Vol. 35, No. 4, pp. 115-121, 2018.

2. 教育研究実績

○A Quantitative Analysis on Relationship between an Early-Closed Bug and Its Amount of Clues: A Case Study of Apache Ant, Akito Sunouchi・Hirohisa Aman・Minoru Kawahara, IEICE Transactions on Information and Systems, vol. E101-D, no. 10, pp. 2523-2525, 2018.

○An Entropy-Based Metric of Developer Contribution in Open Source Development and Its Application to Fault-Prone Program Analysis, Kazuki Yamauchi・Hirohisa Aman・Minoru Kawahara, International Journal of Networked and Distributed Computing, vol. 6, no. 3, pp. 118-132, 2018.

○Stochastic modeling of self-evolving botnets with vulnerability discovery, Takanori Kudo・Tomotaka Kimura・Yoshiaki Inoue・Hirohisa Aman・Kouji Hirata, Computer Communications, vol. 124, pp. 101-110, 2018.

○An Evaluation of Coding Violation Focusing on Change History and Authorship of Source File, Aji Ery Burhandenny・Hirohisa Aman・Minoru Kawahara, International Journal of Networked and Distributed Computing, vol. 5, no. 4, pp. 211-220, 2017.

○Change-Prone Java Method Prediction by Focusing on Individual Differences in Comment Density, Aji Ery Burhandenny・Hirohisa Aman・Minoru Kawahara, IEICE Transactions on Information and Systems, vol. E100-D, no. 5, pp. 1128-1131, 2017.

○決定木を用いた Java メソッドの名前と実装の適合性評価法の提案, 鈴木翔・阿萬裕久・川原稔, ソフトウェア工学の基礎 XXIV, pp. 63-72, 近代科学社, 2017.

○設備故障が旅客に与える経済的損失を評価尺度とした鉄道信号設備のライフサイクルコストの低減に関する考察, 志田洋・大串裕郁・樋上喜信・阿萬裕久・高橋寛, 電子情報通信学会論文誌 D, vol. J99-D, no. 5, pp. 539-548, 2016.

○Lines of Comments as a Noteworthy Metric for Analyzing Fault-Proneness in Methods, Hirohisa Aman・Sousuke Amasaki・Takashi Sasaki・Minoru Kawahara, IEICE Transactions on Information and Systems, Vol. E98-D, No. 12, pp. 2218-2228, 2015.

○変数名とスコープの長さ及びコメントに着目したフォールト潜在性に関する定量的調査, 阿萬裕久・天寄聡介・佐々木隆志・川原稔, ソフトウェアエンジニアリングシンポジウム 2015 論文集, pp. 69-76, 2015.

○テストケースのクラスタリングと 0-1 計画モデルを組み合わせた回帰テストの効率化, 阿萬裕久・佐々木愛美・中野隆司・小笠原秀人・佐々木隆志・川原稔, コンピュータソフトウェア, Vol. 32, No. 3, pp. 111-125, 2015.

○大規模 OSS 開発における不具合修正時間の短縮化を目的としたバグトリアージ手法, 柏祐太郎・大平雅雄・阿萬裕久・亀井靖高, 情報処理学会論文誌, Vol. 56, No. 2, pp. 669-681, 2015.

国際学会発表論文

○Empirical Study of Fault Introduction Focusing on the Similarity among Local Variable Names, Hirohisa Aman・Sousuke Amasaki・Tomoyuki Yokogawa・Minoru Kawahara, Proc. 7th International Workshop on Quantitative Approaches to Software Quality, pp. 3-11, 2019.

○Applying Cross Project Defect Prediction Approaches to Cross-Company Effort Estimation, Sousuke Amasaki・Tomoyuki Yokogawa・Hirohisa Aman, Proc. 15th International Conference on Predictive Models and Data Analytics in Software Engineering, pp. 76-79, 2019.

○A Comparative Study of Vectorization Methods on BugLocator, Sousuke Amasaki・Tomoyuki Yokogawa・Hirohisa Aman, Proc. 2019 45th Euromicro Conference on Software Engineering and Advanced Applications, pp. 236-243, 2019.

○Consistency Verification of UML Sequence Diagrams Modeling Wireless Sensor Networks, Akira Matsumoto・Tomoyuki Yokogawa・Sousuke Amasaki・Kazutami Arimoto・Hirohisa Aman, Proc. 8th International Congress

2. 教育研究実績

on Advanced Applied Informatics, pp.458-461, 2019.

○ Scalable Laplacian Regularized Least Squares Classification on Anchor Graph, Shozo Saeki · Minoru Kawahara · Hirohisa Aman, Proc. 2019 IEEE/ACIS 4th International Conference on Big Data, Cloud Computing, Data Science & Engineering, pp.71-76, 2019.

○ Towards Better Effort Estimation with Cross-Project Defect Prediction Approaches, Sousuke Amasaki · Tomoyuki Yokogawa · Hirohisa Aman, Proc. Evaluation and Assessment on Software Engineering Conference, pp.357-360, 2019.

○ A Doc2Vec-Based Assessment of Comments and Its Application to Change-Prone Method Analysis, Hirohisa Aman · Sousuke Amasaki · Tomoyuki Yokogawa · Minoru Kawahara, Proc. 25th Asia-Pacific Software Engineering Conference (APSEC2018), pp.643-647, 2018.

○ Fault-Prone Java Method Analysis Focusing on Pair of Local Variables with Confusing Names, Keiichiro Tashima · Hirohisa Aman · Sousuke Amasaki · Tomoyuki Yokogawa · Minoru Kawahara, Proc. 2017 44th Euromicro Conference on Software Engineering and Advanced Applications (SEAA2018), pp.154-158, 2018.

○ Empirical Analysis of Coding Standard Violation Focusing on Its Coverage and Importance, Aji Ery Burhandenny · Hirohisa Aman · Minoru Kawahara, Proc. 2018 IEEE 42nd Annual Computer Software and Applications Conference (COMPSAC2018), pp.837-838, 2018.

○ Fault-Prone Source File Analysis Focusing on the Contribution Entropy in Open Source Development, Kazuki Yamauchi · Hirohisa Aman · Sousuke Amasaki · Tomoyuki Yokogawa · Minoru Kawahara, Proc. 2018 IEEE/ACIS 3rd International Conference on Big Data, Cloud Computing, Data Science & Engineering (BCD2018), pp.7-14, 2018.

○ A Topic Model and Test History-Based Test Case Recommendation Method for Regression Testing, Hirohisa Aman · Takashi Nakano · Hideto Ogasawara · Minoru Kawahara, Proc. 2018 IEEE International Conference on Software Testing, Verification and Validation Workshops, pp.302-397, 2018.

○ A Survival Analysis of Source Files Modified by New Developers, Hirohisa Aman · Sousuke Amasaki · Tomoyuki Yokogawa · Minoru Kawahara, M. Felderer, D. M. Fernández, B. Turhan, M. Kalinowski, F. Sarro, D. Winkler (Eds.) Product-Focused Software Process Improvement, Lecture Notes in Computer Science, vol. 10611, pp.80-88, Springer, 2017.

○ Empirical Study of Abnormalities in Local Variables of Change-Prone Java Methods, Hirohisa Aman · Sousuke Amasaki · Tomoyuki Yokogawa · Minoru Kawahara, Proc. 2017 IEEE 28th International Symposium on Software Reliability Engineering Workshops, pp.214-221, 2017.

○ Empirical Analysis of Words in Comments Written for Java Methods, Hirohisa Aman · Sousuke Amasaki · Tomoyuki Yokogawa · Minoru Kawahara, Proc. 2017 43rd Euromicro Conference on Software Engineering and Advanced Applications (SEAA2017), pp.375-379, 2017.

○ An Application of the PageRank Algorithm to Commit Evaluation on Git Repository, Sho Suzuki · Hirohisa Aman · Sousuke Amasaki · Tomoyuki Yokogawa · Minoru Kawahara, Proc. 2017 43rd Euromicro Conference on Software Engineering and Advanced Applications (SEAA2017), pp.380-383, 2017.

○ Empirical Study of Fault-Prone Method's Name and Implementation: Analysis on Three Prefixes---Get, Set and Be, Sho Suzuki · Hirohisa Aman · Minoru Kawahara, Proc. 2nd International Conference on Big Data, Cloud Computing, Data Science & Engineering (BCD 2017), pp.266-271, 2017.

○ An Empirical Study on Relationships between Comments and Design Properties, Yuto Miyake · Sousuke

2. 教育研究実績

Amasaki・Tomoyuki Yokogawa・Hirohisa Aman, Proc. 2nd International Conference on Big Data, Cloud Computing, Data Science & Engineering (BCD 2017), pp.260-265, 2017.

○Investigation of Coding Violations Focusing on Authorships of Source Files, Aji Ery Burhandenny・Hirohisa Aman・Minoru Kawahara, Proc. 2nd International Conference on Big Data, Cloud Computing, Data Science & Engineering (BCD 2017), pp.254-259, 2017.

○A Replicated Study on Relationship Between Code Quality and Method Comments, Yuto Miyake・Sousuke Amasaki・Hirohisa Aman・Tomoyuki Yokogawa, Applied Computing and Information Technology, Studies in Computational Intelligence 695, pp.17-30, Springer, 2017.

○A Health Index of Open Source Projects Focusing on Pareto Distribution of Developer's Contribution, Hirohisa Aman・Aji Ery Burhandenny・Sousuke Amasaki・Tomoyuki Yokogawa・Minoru Kawahara, Proc. IEEE 8th International Workshop on Empirical Software Engineering in Practice (IWESEP2017), pp.29-34, 2017.

○A Test Case Recommendation Method Based on Morphological Analysis, Clustering and the Mahalanobis-Taguchi Method, Hirohisa Aman・Takashi Nakano・Hideto Ogasawara・Minoru Kawahara, Proc. 10th IEEE International Conference on Software Testing, Verification and Validation Workshops, pp.29-35, 2017.

○Examination of Coding Violations Focusing on Their Change Patterns over Releases, Aji Ery Burhandenny・Hirohisa Aman・Minoru Kawahara, Proc. 23rd Asia-Pacific Software Engineering Conference (APSEC 2016), pp.121-128, 2016.

○Local Variables with Compound Names and Comments as Signs of Fault-Prone Java Methods, Hirohisa Aman・Sousuke Amasaki・Tomoyuki Yokogawa・Minoru Kawahara, Joint Proc. the 4th International Workshop on Quantitative Approaches to Software Quality (QuASoQ2016) and 1st International Workshop on Technical Debt Analytics (TDA 2016), pp.4-11, 2016.

○Application of Mahalanobis-Taguchi Method and 0-1 Programming Method to Cost-Effective Regression Testing, Hirohisa Aman・Yuta Tanaka・Takashi Nakano・Hideto Ogasawara・Minoru Kawahara, Proc. 2016 42nd Euromicro Conference on Software Engineering and Advanced Applications (SEAA2016), pp.240-244, 2016.

○Empirical Study of Change-Prone and Fault-Prone Method Prediction Focusing on Comment Ownership, Aji Ery Burhandenny・Takashi Nakano・Hirohisa Aman・Minoru Kawahara, Proc. 2016 International Conference on Business and Information (BAI2016), vol.8, pp.219-230, 2016.

○Behavior Analysis of Self-Evolving Botnets, Takanori Kudo・Tomotaka Kimura・Yoshiaki Inoue・Hirohisa Aman・Kouji Hirata, Proc. 2016 International Conference on Computer, Information and Telecommunication Systems (CITS2016), pp.1-5, 2016.

○Empirical Analysis of Change-Proneness in Methods Having Local Variables with Long Names and Comments, Hirohisa Aman・Sousuke Amasaki・Takashi Sasaki・Minoru Kawahara, Proc. 9th ACM/IEEE International Symposium on Empirical Software Engineering and Measurement (ESEM2015), pp.50-53, 2015.

○Predicting Fault-Prone Methods Focusing on the Combination of Inner Comments and Documentation Comments, Hirohisa Aman・Sousuke Amasaki・Takashi Sasaki・Minoru Kawahara, Proc. Work in Progress Session held in connection with SEAA2015 and DSS 2015, pp.3-4, 2015.

紀要・抄録・報告

○変数に着目した変更メトリクスの有効性について ～フォールト混入予測精度の比較実験～, 川上卓也・阿萬裕久・川原稔, 電子情報通信学会技術研究報告, vol.119, no.246, SS2019-22, pp.53-58, 2019.

○バグ票の類似度に基づいたバグ位置推定手法の改善に向けた提案 ～TraceScore 値の分配に関する比較実験～,

2. 教育研究実績

- 安里昌真・阿萬裕久・川原稔, 電子情報通信学会技術研究報告, vol. 119, no. 112, SS2019-4, pp. 99-104, 2019.
- 階層的な制御構造をもつシーケンス図間の整合性検証手法の開発, 松本明・横川智教・天寄聡介・阿萬裕久・有本和民, 電子情報通信学会技術研究報告, vol. 119, no. 112, SS2019-2, pp. 47-52, 2019.
- ビジュアルプログラミングを用いた NuSMV のモデル生成支援環境, 内藤駿人・横川智教・天寄聡介・阿萬裕久・有本和民, 電子情報通信学会技術研究報告, vol. 119, no. 112, SS2019-1, pp. 41-46, 2019.
- トピックの変化量に着目したソースコードの変更量分析に関する考察, 矢野博暉・阿萬裕久・川原稔, 情報処理学会ソフトウェア工学研究報告, vol. 2018-SE-198, no. 30, pp. 1-8, 2018.
- Java ソースファイルの開発者数とバグ修正の起こりやすさに関する調査 ～ソースファイル間の依存関係に着目した解析～, 山内一輝・阿萬裕久・川原稔, 電子情報通信学会技術研究報告, vol. 117, no. 136, pp. 67-72, 2017.
- バグ予測に向けた Java メソッドの名前と実装の特徴に関する考察, 鈴木翔・阿萬裕久・川原稔, 電子情報通信学会技術研究報告, vol. 116, no. 512, pp. 25-30, 2017.
- メソッド名の先頭単語とソースコードの安定性に関する考察, 鈴木翔・阿萬裕久・川原稔, ソフトウェア工学の基礎 XXIII, pp. 247-248, 近代科学社, 2016.
- 一人で開発・保守が行われているソースファイルの品質について, 山内一輝・阿萬裕久・川原稔, ソフトウェア工学の基礎 XXIII, pp. 251-252, 近代科学社, 2016.
- ソースコードの変更予測に向けたメソッド名の先頭単語に関する定量的調査, 鈴木翔・阿萬裕久・川原稔, 情報処理学会ソフトウェア工学研究報告, vol. 2016-SE-194, no. 6, pp. 1-8, 2016.
- コード行数に基づいた開発者の貢献度とそのエントロピーを用いた OSS プロジェクトの分析, 山内一輝・阿萬裕久・川原稔, 電子情報通信学会技術研究報告 vol. 116, no. 127, pp. 131-136, 2016.
- メソッド名の長さや構成に着目したソースコード品質に関する定量的調査, 鈴木翔・阿萬裕久・川原稔, 電子情報通信学会技術研究報告 vol. 116, no. 127, pp. 137-142, 2016.
- オープンソース開発における開発者の貢献度とソースコード品質の関係について, 山内一輝・阿萬裕久・川原稔, 情報処理学会ウインターワークショップ 2016・イン・逗子 論文集, pp. 41-42, 2016.
- プログラム依存グラフ上での命令間の距離に着目した凝集度メトリクスの提案とバグ予測への応用, 加藤健太・阿萬裕久・川原稔, 電子情報通信学会技術研究報告, vol. 115, no. 421, pp. 1-6, 2016.
- 共変更の新しさと開発者の貢献度合いに着目したロジカルカップリングの評価---ソースコード修正漏れの自動検出に向けて---, 尾田祐之介・阿萬裕久・川原稔, 情報処理学会研究報告ソフトウェア工学, Vol. 2015-SE-190, No. 17, pp. 1-8, 2015.
- 開発者の違いを考慮したコメント記述量の評価とバグ予測への応用, 中野貴史・阿萬裕久・川原稔, ソフトウェア信頼性研究会 第 11 回ワークショップ論文集, オンライン, 2015.
- オープンソース開発における開発者ごとのコメント記述の傾向に関する調査, 中野貴史・佐々木隆志・川原稔・阿萬裕久, 電子情報通信学会技術研究報告, Vol. 115, No. 153, pp. 125-130, 2015.

佐々木 隆志

原著論文

- Lines of Comments as a Noteworthy Metric for Analyzing Fault-Proneness in Methods, Hirohisa Aman・Sousuke Amasaki・Takashi Sasaki・Minoru Kawahara, IEICE Transactions on Information and Systems, Vol. E98-D, No. 12, pp. 2218-2228, 2015.
- 変数名とスコープの長さ及びコメントに着目したフォールト潜在性に関する定量的調査, 阿萬裕久・天寄聡介・佐々木隆志・川原稔, ソフトウェアエンジニアリングシンポジウム 2015 論文集, pp. 69-76, 2015.

2. 教育研究実績

○テストケースのクラスタリングと 0-1 計画モデルを組み合わせた回帰テストの効率化, 阿萬裕久・佐々木愛美・中野隆司・小笠原秀人・佐々木隆志・川原稔, コンピュータソフトウェア, Vol. 32, No. 3, pp.111-125, 2015.

○大規模 OSS 開発における不具合修正時間の短縮化を目的としたバグトリアージ手法, 柏祐太郎・大平雅雄・阿萬裕久・亀井靖高, 情報処理学会論文誌, Vol. 56, No. 2, pp. 669-681, 2015.

国際学会発表論文

○Empirical Analysis of Change-Prone Methods Having Local Variables with Long Names and Comments, Hirohisa Aman・Sousuke Amasaki・Takashi Sasaki・Minoru Kawahara, Proc. 9th ACM/IEEE International Symposium on Empirical Software Engineering and Measurement (ESEM2015), pp.50-53, 2015.

○Predicting Fault-Prone Methods Focusing on the Combination of Inner Comments and Documentation Comments, Hirohisa Aman・Sousuke Amasaki・Takashi Sasaki・Minoru Kawahara, Proc. Work in Progress Session held in connection with SEAA2015 and DSS 2015, pp.3-4, 2015.

裏 和宏

原著論文

○講義の効率的運用を支援する香川大学型 IT 教卓システム:一開発運用サイクルに基づいた IT 教卓システムの開発実践一, 八重樫理人・寺尾徹・林敏浩・村井礼・岩城暁大・裏和宏・今井慈郎・堀幸雄・末廣紀史・大塚輝・最所圭三, 教育システム情報学会誌, 32(1), pp.84-97, 2015.

国際学会発表論文

○Active S-quiz: An intelligent educational system for basic knowledge learning by question-posing, Toshihiro Hayashi・Shimpei Nakagawa・Takuya Kishimoto・Yuji Hirai・Kazuhiro Ura・Rihito Yaegashi・Hiroshi Murai, 16th IEEE/ACIS International Conference on Software Engineering, Artificial Intelligence, Networking and Parallel/Distributed Computing, SNPD 2015, pp.583-586, 2015.

○A study of load-balancing strategy based on students' action on university cooperative e-Learning, Hiroshi Murai・Kazuhiro Ura・Norifumi Suehiro・Rihito Yaegashi・Yoshiro Imai・Keizo Saisho・Toshihiro Hayashi, 16th IEEE/ACIS International Conference on Software Engineering, Artificial Intelligence, Networking and Parallel/Distributed Computing, SNPD 2015, pp.587-590, 2015.

紀要・抄録・報告

○簡易動画作成システム Galop における 注釈付き操作履歴の表示による学習過程の把握, 藤丘泰弘・裏和宏・垂水浩幸・林敏浩・中山迅, 科教研報, 28(6), pp.19-22, 2018.

○学習到達度測定法の違いによる講義コンテンツ視聴傾向分析—実証実験の実施方法—, 矢部智暉・岡田直也・國枝孝之・後藤田中・裏和宏・藤本憲市・林敏浩・八重樫理人, 電気関係学会四国支部連合大会講演論文集 (CD-ROM), 2017, 17-14, 2017.

○大学連携 e ラーニングにおける認証連携方式の変更に伴う移行方法について, 後藤田中・裏和宏・藤本憲市・林敏浩, 電気関係学会四国支部連合大会講演論文集 (CD-ROM), 2017, F6-1, 2017.

○大学連携 e ラーニングの共同実施におけるシステムトラブル対応について, 裏和宏・藤本憲市・後藤田中・林敏浩, 教育システム情報学会全国大会講演論文集 (CD-ROM), 42nd, F6-4, 2017.

○投稿型自主学習素材共有システムにおける学習時間を考慮した出題問題数の最大化, 平井裕史・今井惇平・中川晋平・裏和宏・後藤田中・八重樫理人・村井礼・市野順子・垂水浩幸・林敏浩, 電気関係学会四国支部連合大会講演論文集 (CD-ROM), 2015, 17-40, 2015.

○投稿型自主学習素材共有システムにおける学習時間を考慮した問題出題手法, 平井裕史・今井惇平・中川晋平・

2. 教育研究実績

裏和宏・後藤田中・八重樫理人・村井礼・市野順子・垂水浩幸・林敏浩, 電子情報通信学会技術研究報告, 115(223(ET2015 32-42)), pp.13-18, 2015.

○香川大学における大学連携用 e-Learning 環境の負荷テスト調査, 村井礼・藤本憲市・裏和宏・末廣紀史・八重樫理人・今井慈郎・最所圭三・林敏浩, 香川大学総合情報センター年報, 11(11), pp.5-8, 2015.

○投稿型自主学習素材共有システムにおける不正解した問題の再出題手法, 平井裕史・岸本卓也・中川晋平・裏和宏・八重樫理人・村井礼・市野順子・垂水浩幸・林敏浩, 電子情報通信学会技術研究報告, 114(513(ET2014 85-117)), pp.153-156, 2015.

○大学連携 e-Learning における負荷対策に関する一考察, 村井礼・裏和宏・岩城暁大, 教育システム情報学会研究報告 (JSiSE research report), 29(6), pp.87-90, 2015.

○e - Learning コンテンツと作問学習環境を活用する知的教育システムの開発, 林敏浩・中川晋平・岸本卓也・裏和宏・後藤田中・村井礼・八重樫理人・垂水浩幸, 教育システム情報学会全国大会講演論文集(CD-ROM), 40th, C5-4, 2015.

○大学連携 e - Learning における履修者抽選システムの提案, 藤本憲市・村井礼・林敏浩・裏和宏, 教育システム情報学会全国大会講演論文集(CD-ROM), 40th, H3-4, 2015.

2. 教育研究実績

(2) 学会発表等

中川 祐治

○男女別 IPMR を用いた合計特殊出生率低下の要因推測, 伊藤佑一・中川祐治, 令和元年度電気関係学会四国支部連合大会(新居浜高専), 2019年9月21日.

○セマンティックセグメンテーションによる黒目領域推定, 徳永眞哉・中川祐治, 令和元年度電気関係学会四国支部連合大会(新居浜高専), 2019年9月21日.

○CNN を用いた変体仮名認識手法, 新納裕貴・中川祐治, 令和元年度電気関係学会四国支部連合大会(新居浜高専), 2019年9月21日.

野口 一人

○Polymer Optical Coupling Device with Single Mode Fiber for Silicon Photonics, Ryo Sato, Shuhei Suzuki, Chiemi, Fujikawa, Osamu Mikami, Takayuki Inayama, Kazuya Ohashi, Kazuto Noguchi, 9th IEEE CPMT Symposium Japan (ICSJ2019).

○Polymer Microlens on Single Mode Fiber for Silicon Photonics, Ryo Sato, Shuhei Suzuki, Chiemi, Fujikawa, Osamu Mikami, Takayuki Inayama, Kazuya Ohashi, Kazuto Noguchi, Advances in Applied Plasma Science, Vol. 12, 2019, pp. 37-38.

○電気光学ポリマと高誘電率基板を用いた光変調機の低電圧化に関する検討, 藤原涼太, 野口一人, 令和元年度電気関係学会四国支部連合大会, 2019

3. 教育活動及び教育支援

(1) 教育活動

【講義】

中川 祐治

1) 講義 (情報リテラシー入門)

2019年度 Q1, 情報リテラシー入門 I, 237名, 共通基礎教育科目, 理学部

2019年度 Q1, 情報リテラシー入門 II, 149名, 共通基礎教育科目, 理学部

2) 講義 (情報リテラシー入門以外)

2019年度前期, 環境ESD指導者養成講座 II, 16名, 共通発展科目, 全学部

2019年度前期, 応用数学概論, 10名, 専門教育科目, 修士

2019年度後期, コンピュータ基礎, 57名, 専門教育科目, 理学部

2019年度後期, 数学セミナー II, 7名, 専門教育科目, 理学部

2019年度後期, 環境ESD指導者養成講座 I, 30名, 共通発展科目, 全学部

野口 一人

1) 講義 (情報リテラシー入門)

2019年度 Q1, 情報リテラシー入門 I, 192名, 農学部

2019年度 Q2, 情報リテラシー入門 II, 138名, 農学部

2) 講義 (情報リテラシー入門以外)

2019年度前期, 情報ネットワーク, 105名, 工学部

2019年度前期, 情報ネットワーク, 1名, 教育学部

2019年度後期, 情報ネットワーク, 90名, 工学部

2019年度 Q2, ネットワークシステム特論 I, 3名, ICTスペシャリスト育成コース

2019年度 Q3, ネットワークシステム特論 II, 5名, ICTスペシャリスト育成コース

2019年度 Q1, 新入生セミナー A, 22名, 社会共創学部

2019年度 Q1, 身体運動学, 23名, 社会共創学部

2019年度前期, スポーツ健康情報処理演習, 24名, 社会共創学部

2018年度前期, スポーツ健康 ICT活用演習, 13名, 社会共創学部

2019年度後期, フィールド基礎実習, 25名, 社会共創学部

2019年度後期, プロジェクト基礎演習, 3名, 社会共創学部

2019年度前期, プロジェクト応用演習, 3名, 社会共創学部

2019年度後期, プロジェクト実践演習, 3名, 社会共創学部

2019年度後期, スポーツ健康情報マネジメント演習 I, 3名, 社会共創学部

2019年度前期, スポーツ健康情報マネジメント演習 II, 3名, 社会共創学部

2019年度通期, 卒業研究, 3名, 社会共創学部

川原 稔

2) 講義 (情報リテラシー入門以外)

2019年度前期, データベース論, 98名, 工学部

3. 教育活動及び教育支援

2019年度 Q2, 情報安全学, 506名, 工学部

2019年度後期, 情報基盤システム特論, 11名, 専門教育科目, 理工学研究科修士

阿萬 裕久

1) 講義 (情報リテラシー入門)

2019年度 Q2, 情報リテラシー入門Ⅱ, 33名, 共通基礎教育科目, 工学部

2) 講義 (情報リテラシー入門以外)

2019年度 Q1, 基礎情報科学, 507名, 専門教育科目, 工学部

2019年度前期, ソフトウェア工学, 89名, 専門教育科目, 工学部

2019年度後期, 情報基盤システム特論, 11名, 専門教育科目, 理工学研究科修士

2019年度後期, プログラミング言語Ⅰ (特別指導), 2名, 専門教育科目, 工学部

2019年度後期, プログラミング言語Ⅰ演習 (特別指導), 1名, 専門教育科目, 工学部

佐々木 隆志

1) 講義 (情報リテラシー入門)

2019年度 Q1, 情報リテラシー入門Ⅰ, 60名, 共通基礎教育科目, 法文学部

2019年度 Q2, 情報リテラシー入門Ⅱ, 30名, 共通基礎教育科目, 法文学部

裏 和宏

1) 講義 (情報リテラシー入門)

2019年度 Q1, 情報リテラシー入門Ⅰ, 168名, 共通基礎教育科目, 教育学部

2019年度 Q2, 情報リテラシー入門Ⅱ, 122名, 共通基礎教育科目, 教育学部

【論文指導】

中川 祐治

2019年度 卒業論文指導 学生数 5名

野口 一人

2019年度 修士論文指導 学生数 1名

2019年度 卒業論文指導 学生数 5名

川原 稔

2019年度 卒業論文指導(主査) 学生数 4名

2019年度 卒業論文指導(副査) 学生数 5名

阿萬 裕久

2019年度 卒業論文指導 学生数 4名

3. 教育活動及び教育支援

【論文審査】

中川 祐治

2019年度 修士論文審査数（主査）3名

野口 一人

2019年度 修士論文審査数（副主査）3名

2019年度 修士論文審査数（主査）1名

（2）教育支援

【サークル等活動指導】

中川祐治

○キリスト者学生会（KGK）顧問

4. 研究活動

(1) 研究成果

中川 祐治

○ディープラーニングによる受講者観察システムの高性能化

従来のシステムでは、全方向微分フィルタを用いて黒目中心検出が行われていた。全方向微分フィルタとは画像中のある画素に対して、半径 r の黒目の中心の可能性を評価するフィルタである。全方向微分フィルタは、フィルタ半径が黒目の半径と一致する場合には高精度で検出することができるが、一致しない場合は黒目中心を検出することができない。そのため、カメラと受講者の距離変化といった環境変化に対応できない。そこで本研究では、ニューラルネットワークによる高速化と環境変化の頑健性を得るために、U-Net を用いたディープラーニングで大まかな目領域から黒目領域を推定し、その結果から黒目中心を検出する。

まず、U-Net を用いた黒目領域推定については、事前に U-Net をディープラーニングによりモデルパラメータを決定したのち、各フレームにおいて推論処理を行う。学習データとしては、目領域が写っているグレースケール画像(64pixel×64pixel)を用意し、それぞれに対してアノテーション画像を作成する。アノテーション画像における黒目の形は、開閉状態に依存せず真円とする。なお完全に閉じている。または瞬き中である場合には黒目が存在しないものとし、アノテーション画像のすべての画素を 0 とする。そして学習を行い、モデルパラメータを保存する。実際に推論を行なった後、エッジを検出し入力画像に加算したものである。黒目半径の異なる入力画像に対して、共に黒目領域が推定できている。しかし被験者の睫毛に反応を示し、歪な領域となってしまう場合も存在する。

次に、推定された黒目領域に対して黒目中心検出を行う。本研究では Circlefit による手法、黒目境界に着目した画像処理手法をそれぞれ試行した。Circlefit による手法では、推定された黒目領域に対して、まず境界部分を検出し、その座標を候補点として Circlefit を行い、中心座標と半径を推定する。中心座標と半径を推定した後に、各候補点における誤差を算出し、誤差が大きい点を除外したのち、再度 Circlefit を行う。この処理を、誤差が指定値以下になるまで繰り返し行う。Circlefit を用いた手法は、黒目領域推定における誤差や、睫毛への反応による外れ値の存在から、結果に対してズレを生じる場合が多くなる。Saccade の検出には水平方向に対して正確な座標情報が必要なため、Circlefit のみを用いた方法ではうまく検出を行うことができない。そこで黒目境界に着目し、水平方向の正確な座標を画像処理により求めることにした。黒目境界に着目した画像処理手法では、まず、黒目領域推定後の画像から黒目境界の座標を抽出する。そして抽出された座標に対して水平方向に最大±1pixel の補正を行う。補正方法は、まず候補の座標 (x, y) と $(x-1, y)$, $(x+1, y)$ の 3 つの座標を用意し、この 3 つの座標に関して黒目領域推定前の画像に Sobel フィルタを適用し、エッジ強度をそれぞれ算出する。そしてエッジ強度が最大となる値の座標を補正後の値とする。全ての補正が終了した後、補正後の座標群に対して中心を求め、それを水平方向の黒目中心座標とする。以上の手順により、水平方向の中心座標を正確に求めることができる。また、黒目中心を求めた次のフレームでは、前のフレームで求めた黒目中心座標を中心として黒目領域推定時の入力画像を決定する。これは、処理を行う範囲を黒目の動きに合わせて追従させることによ

4. 研究活動

り、黒目領域推定時の精度向上を図るためである。

以上により、環境変化に対して頑健なシステムを構築することができた。

○合計特殊出生率低下と食生活の変化に関する考察

近年、日本は二つの重要な問題を抱えている。一つは人口減少である。総務省の人口推計によると、日本の総人口は平成 20 年に約 12,769 万人に達し過去最大の人口となったが、以降減少しており平成 29 年には約 12,670 万人にまで減少し、この 9 年間で約 100 万人減少している。もう一つは少子高齢社会に突入り少子高齢化が進行していることである。

この二つの問題の原因として、合計特殊出生率(Total Fertility Rate, 以下 TFR)が日本の人口を維持するために必要な値(2.07)に達していないことが考えられる。TFR は女性 1 人が 15 から 49 歳の間に産む子どもの数であり、事故死、病死等により子どもが早く亡くなってしまふ場合を考え、人口維持に必要な値は 2.07 といわれている。では何故 TFR が 2.07 に達していないのかについて、我々は過去に IPMR(Inflexion Point of Married Rate)や INMRI(Integrated and Normalized slope of Married Rate up to IPMR)という値を用いて考察した。すると若い世代、特に男性の有配偶率が低いことが TFR の低下に影響している可能性が高いことが分かった。

そこで本研究では何故若い世代が結婚していないのかを考察する。考察する上で、江戸時代の ある事実が浮かび上がった。それは煮売り屋といわれる現代でいう惣菜を消費者に対して売っている店が増えた時期に、独身男性が増えたことである。すなわち食生活が変化することにより、結婚する必要がなくなったというこの事実が、現代日本においても起きているのかを行政のオープンデータを用いて平成 24 年の各都道府県を対象として考察する。対象年度の選択理由は、食生活に関するデータの存在を最優先したためである。

TFR に関する値として IPMR と INMRI がある。それらは各歳の有配偶率から計算される。しかし、各歳の有配偶率は国勢調査にしか存在せず、平成 24 年は国勢調査が行われていないのでデータが存在しない。そこで過去 8 回分(昭和 55 年から平成 27 年、5 年おき)のデータから、3 次エルミート補間により各歳の有配偶率を推定し、IPMR は従来と同様に求め、INMRI は従来の手法が離散値で計算されていたことから正確な値でなかったことを考慮し、3 次スプライン補間により連続値として計算することで従来の手法と比べ正確な値を求める。

食生活に関しては、平成 24 年度経済センサスから小売業で食品を扱っている業種(例:スーパーマーケット、パン屋)と飲食サービス事業を営んでいる業種(例:日本料理店、ハンバーガー店)の都道府県別のデータを取得し値を二つ算出している。一つは「一事業当たりの売上」である。業種別で売上を事業所数で割ることにより算出している。しかし、本研究対象の業種の中には、情報保護の観点から売上のデータが公開されていないものが存在する。そこで、それらに関しては Ridge 回帰により値を推定し、欠損値処理を行っている。二つ目は「IPMR 以下の年齢の人口に対する事業所数」である。しかし IPMR は都道府県により異なるため、仮に IPMR 以下の年齢の人口を足しても比較することができない。そこで、INMRI のように IPMR 以下の年齢の人口を 3 次スプライン補間により連続値として扱い、積分後正規化し比較できるようにする。本研究ではその正規化した人口を INPI(Integrated and Normalized Population up to IPMR)

4. 研究活動

と呼び、IPMR 以下の年齢の人口は INPI を用いて算出している。また事業所数にも経済センサスの調査方法から一部の業種では事業所数に含まれていないものが存在する。本研究では日本全体の業種別の事業所数が正しいことから、この値を使って、都道府県別の真の事業所数を求めている。

本研究では TFR 及び男女別 INMRI と食生活に関する二つの値 (INPI に対する事業所数は男女別にあるため計 3 つ) の関係性、すなわちどの業種のどの値が TFR や男女別 INMRI に寄与しているのかを調べる。そこで、目的変数を TFR 及び男女別 INMRI、目的変数を食生活に関する二つの値に定め、スパース推定の一つである elastic net を用いてモデル推定及び、どの程度関与しているのかを調べた。その結果 TFR はモデル推定できなかったが、男女別 INMRI はモデル推定でき、日本料理店の一事業所当たりの売上が両者共に最も関与している可能性が高いことが分かった。

野口 一人

○ 光デバイスに関する研究

強誘電体であるニオブ酸リチウム (LiNbO_3) は、優れた電気光学特性、音響光学特性、非線形光学特性を有している。光通信システムでは、光源である半導体レーザーの後段に接続される外部光変調器として研究開発が進み、今日の長距離・大容量情報通信ネットワークを支えるキーデバイスの一つである。現在もお、将来の大容量化・高性能化を目指した研究開発が進められている。

現在、光変調器のさらなる高性能化を図るため、小型化が有望な材料を用いたシリコンフォトニクス、低駆動電圧化が有望な電気光学ポリマーなど、他の材料系のデバイス設計に取り組んでいる。卒論指導を通じて有限要素法による解析プログラムの作成、およびデバイスシミュレーション、光結合系の研究を進めている。

今年度は、東海大学との共同研究により、シリコンフォトニクスデバイスと光ファイバとの結合系の設計を行った。シリコンフォトニクスデバイスへ光を入射し、処理した光信号を取り出す際に実用上重要なものは、デバイス上に形成された光導波路と伝送路である光ファイバとの結合効率を。光ファイバの先端に紫外線硬化樹脂を塗布し、紫外線を光ファイバのコアから照射することにより、ピラー(円柱)型の光導波路を形成することができる。また硬化条件を整えることにより、ピラーの先端に半球状のレンズを形成する構成が東海大学から提案されている。

愛媛大学では、ピラーとレンズ系の設計を行った。先レンズの曲率半径やピラー長に関する設計を行った。また、光導波路解析で開発した有限要素法による光導波路解析プログラムを拡張し、ピラー半径と伝搬モードについて解析を行った。これにより、シングルモード条件で、結合損失が最小になる設計値を求めることができた。

○ ICT のスポーツ・健康マネジメント応用に関する研究

近年の情報通信技術 (ICT) とセンサ技術の発達により、人間の様々な活動データを計測し、インターネット経由で収集して分析することが可能になった。今年度は、画像解析技術とセンサを組み合わせ、硬式野球における投手の投球内容と投球動作の推移、学習時における集中力と姿勢の関係を調べた。

投球の解析においては、ジャイロセンサを組み込んだ硬式野球用の投球動作解析ボールを用いた。球速、

4. 研究活動

回転数、回転軸など、ボール内のセンサで検知したデータは、あらかじめペアリングしたスマートフォンを介してサーバに送られる。投球動作をマウンドの横から高速カメラで動画撮影し、パソコンに取り込んで、画像解析ソフト Kinovea を用いて解析した。肩や肘の角度・位置、膝の角度を計測できる。投球数の増加によって、投球フォームの変化や投球速度の変化は、選手の体格による個別性が高く、被験者 3 人すべての選手に共通した特徴は見られなかった。特に、選手の経験年数により、パフォーマンスの安定性に差が生じることがわかった。

故障を防ぎ、高い投球パフォーマンスを得るためには、投球フォームやボールの分析を個別に行うことが有効である。各選手の関節機能や能力にあった投球フォームを指導し、個別にチェックポイントを設定することで、投球フォームの変容がより明確になる。

川原 稔

○視線誘導型視野計測手法に関する研究

視野の把握は、緑内障や網膜変性症などの疾患を早期発見・早期対処するために重要な役割を果たす。現存する視野計測法では、視線を固視して計測を行う必要があり、被験者にとって負担が大きいものである。本研究では、視野計測を行うための視標を目で追って視線を自由に動かすことができる計測法を発明し、被験者が反応する時間計測に基づいて視野暗点を検出することができるようになった。本研究に基づいてヘッドマウントディスプレイに構築した計測システムを用いて、京都大学医学部附属病院眼科において計測データを取得している。本発明は、特許 6230086 号「視野計測方法、視野計測装置及び視力検査視標」として知的財産権が認められたものである。それに加えて、目線追跡（アイトラッキング）及び視標表示シフト方式に関して特願 2018-240561 として特許出願を行った。

阿萬 裕久

○データ解析に基づいたソフトウェア品質評価・予測に関する研究

ソフトウェアの品質はその開発に携わる技術者の経験や力量に依存しやすく、個体差が大きい。そのため個々の案件だけでなく、統計的なデータ解析の観点からソフトウェアの品質を評価・予測することが重要であり、1990 年代後半からこのテーマに取り組んでいる。現在は特に、プログラマがプログラムの中に書き込むコメント文や変数に付ける名前に着目しており、このような個人差の出やすい特徴の品質への影響について研究を行っている。2019 年度はこのテーマに関する成果発表を 8 件（論文誌 1 件、国際会議 4 件、査読付ワークショップ 1 件、研究会 2 件）行い、他大学の研究者からは良好な反応が得られている。

○効率的なソフトウェアレビュー及びテストの実践に関する研究

一般にソフトウェアの正しさは、その内容確認と動作確認によって保証される。前者はレビューと呼ばれ、多くの場合は複数の技術者がドキュメントやプログラムの内容を目視によって確認する作業となる。後者はテストと呼ばれ、実際にソフトウェアが正しく動作するかどうかを確認する作業となる。いずれも重要な作業であるが、工数（人手と時間）を多く必要とするところが現場では大きな問題となっている。この問題を解決すべく、レビュー及びテストの効率化について研究を行っている。2019 年度には研究成果

4. 研究活動

の一部を国際会議にて発表し，高い評価を受けた。

5. 業務関連

(1) 沿革

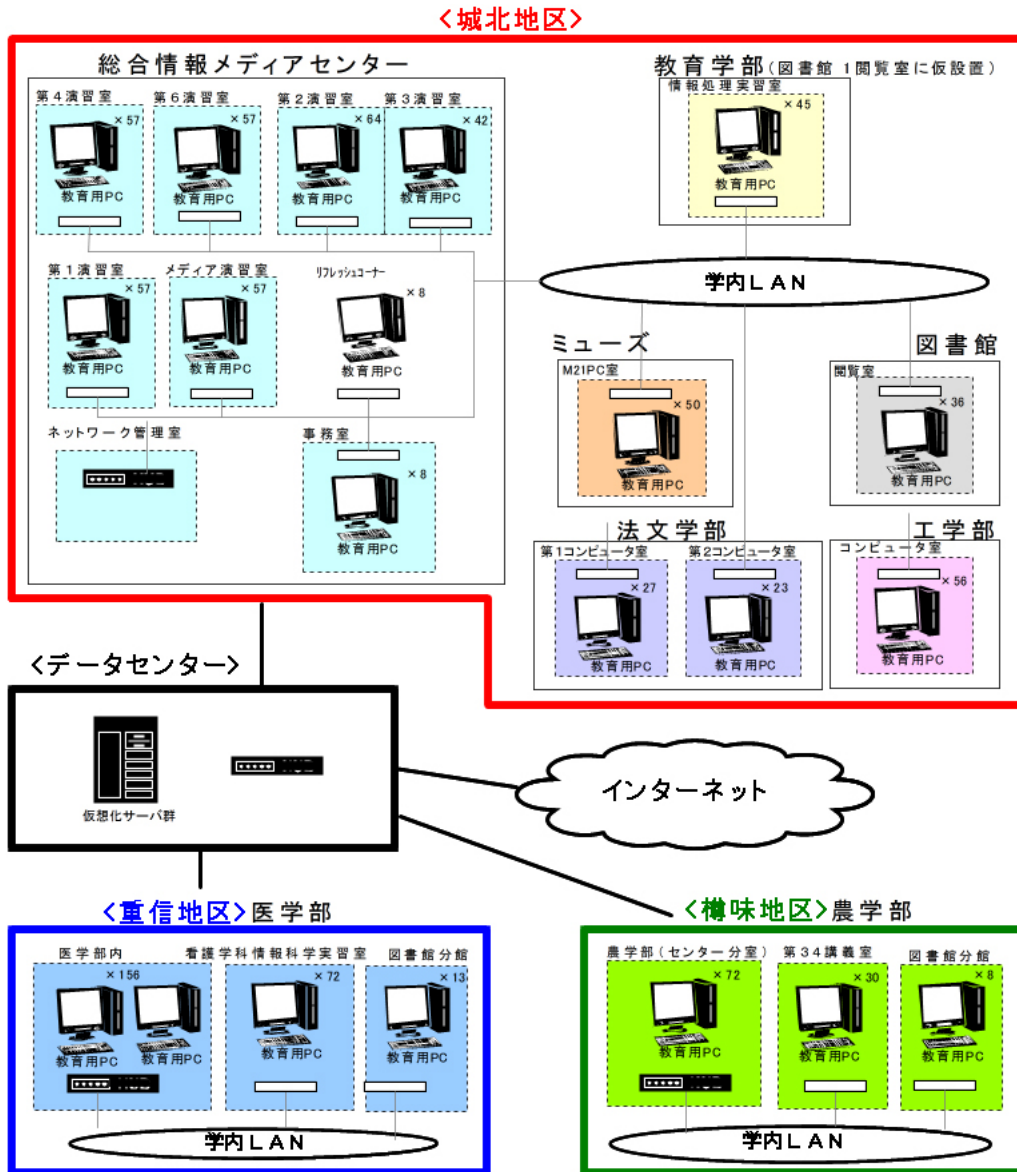
- 昭和 41 年 3 月 愛媛大学電子計算機室（学内共同利用施設）発足，HIPAC103（主記憶：4KW）導入
- 昭和 50 年 2 月 愛媛大学計算機室に名称変更
- 昭和 50 年 3 月 FACOM230-28（主記憶：96KB）を設置，九州大学大型計算機と専用回線で接続
- 昭和 57 年 7 月 情報処理センター発足
- 昭和 57 年 11 月 情報処理センター建物完成（835.3 平方メートル）
- 昭和 58 年 2 月 FACOM M180IIAD システム（主記憶：12MB）導入
- 昭和 58 年 3 月 九州大学大型計算機センターと大学間ネットワーク（N1）手順により接続
- 昭和 60 年 3 月 DDX 加入
- 昭和 61 年 11 月 FACOM M360AP（主記憶：24MB）に変更
- 昭和 62 年 4 月 FACOM M360AP システムに更新
- 平成 2 年 1 月 学術情報センターノード運用開始，DDX 解除
- 平成 2 年 10 月 JUNET 電子メールサービスの開始
- 平成 3 年 2 月 FACOM M770/6 システム（主記憶：64MB）導入
- 平成 4 年 2 月 JAIT に接続
- 平成 5 年 4 月 総合情報処理センター発足
- 平成 5 年 12 月 SINET ノード設置
- 平成 6 年 2 月 FACOM M1600/6 システム（主記憶:128MB）,CONVEX C3440CT システム導入
- 平成 6 年 3 月 学内ネットワーク（EUNET）の構築
- 平成 9 年 11 月 ATMネットワークシステムの構築
- 平成 10 年 2 月 S-7/7000U モデル 500, FACOM M1600/6 システム導入
- 平成 12 年 2 月 総合情報処理センター建物完成（1871 平方メートル）
- 平成 13 年 3 月 学内ギガネットワークシステムの構築
- 平成 14 年 2 月 PRIMPOWER 600, パソコンシステム導入
- 平成 15 年 4 月 総合情報メディアセンター発足
- 平成 15 年 9 月 総合情報メディアセンター・放送大学建物完成
- 平成 18 年 2 月 総合情報メディアセンター情報基盤システム導入
- 平成 19 年 6 月 SINET3 本格運用
- 平成 22 年 3 月 構内光ケーブル張替
- 平成 22 年 10 月 総合情報メディアセンター情報基盤システム導入
- 平成 23 年 3 月 SINET4 運用
- 平成 23 年 4 月 先端研究・学術推進機構総合情報メディアセンターに組織変更
- 平成 26 年 9 月 総合情報メディアセンター情報基盤システム導入
- 平成 28 年 2 月 SINET5 運用
- 平成 30 年 4 月 先端研究・学術推進機構総合情報メディアセンターの部門を改編
- 令和 元年 9 月 総合情報メディアセンター情報基盤システム導入

5. 業務関連

(2) 情報基盤システム

○システム構成概念

令和元年9月に情報基盤システムの更新を行いました。システム概念は次のとおりです。



5. 業務関連

○ネットワーク概念

令和元年度の情報基盤システムネットワークは次のとおりです。

ネットワークシステム概念図

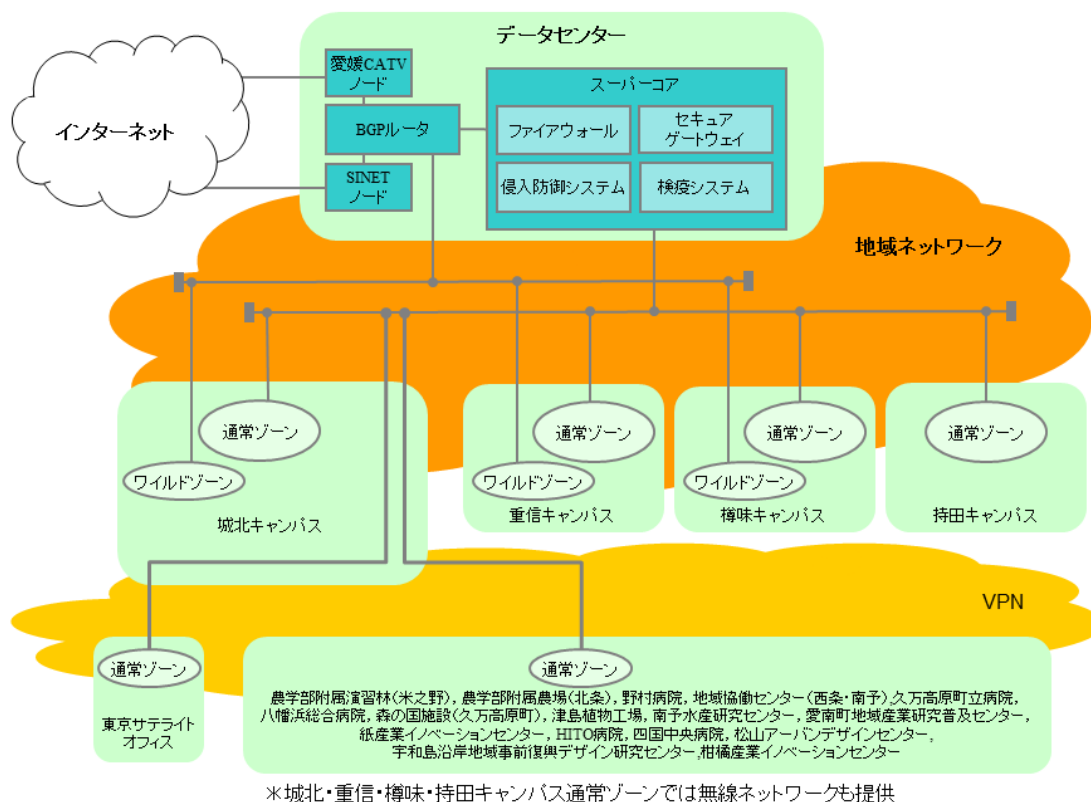


図 ネットワーク概念

(3) 事業実績

○セキュリティ関連

- ・情報セキュリティ教育及び確認テスト(6月)

教職員の情報セキュリティに関する意識向上のための情報セキュリティ教育及び確認テストを、e-ラーニングにより実施した。

- ・標的型攻撃メール訓練(11月)

教職員対象に標的型攻撃メールの訓練メールを送信した。

- ・セキュリティ脆弱性検査実施(11月から随時)

学内の申請サーバについてセキュリティ対策脆弱性検査を実施し、脆弱性が発見された利用者には通知を行い、対策を依頼した。

○ネットワーク関連

- ・キャンパス間接続(城北・持田・樽味・重信)を40Gbps×2へ変更(8月)
- ・SINET5接続回線を40Gbpsへ変更(8月)

5. 業務関連

- ・久万高原町立病院を広域 Ether 接続に変更（8月）
- ・情報基盤システム（ネットワークシステム）更新（9月）
- ・柑橘産業イノベーションセンターと ADSL で接続（10月）
- ・地域協働センター（南予）と接続（10月）

(4)利用状況

令和元年度のセンター利用状況は次のとおりです。

○情報基盤システム

センターメール及びLMS利用アカウントは、全学アカウントを持つ教職員及び学生以外の方が対象です。

| 申請種別 | 登録数 |
|---------------|---------|
| センターメール | 32 件 |
| セキュアゲートウェイ | 374 件 |
| ホスティング (OS) | 43 件 |
| ホスティング (Web) | 78 件 |
| LMS利用アカウント | 51 件 |
| LMS利用 (コース登録) | 1,616 件 |

○夜間開放・休日開放

夜間開放は、毎週月～金の17:00～21:00、休日開放（2007年9月から実施）は、10:00～17:00に第1演習室を開放しています。（ただし、夏季休暇及び冬季休暇中は除く）

| | 夜間開放利用者数 | 休日開放利用者数 |
|----------|----------|----------|
| 2019年 4月 | 150人 | 26人 |
| 2019年 5月 | 576人 | 72人 |
| 2019年 6月 | 440人 | 92人 |
| 2019年 7月 | 633人 | 102人 |
| 2019年 8月 | 125人 | 28人 |
| 2019年 9月 | 138人 | 38人 |
| 2019年10月 | 305人 | 99人 |
| 2019年11月 | 481人 | 76人 |
| 2019年12月 | 518人 | 116人 |
| 2020年 1月 | 489人 | 79人 |
| 2020年 2月 | 238人 | 84人 |
| 2020年 3月 | --- | --- |

5. 業務関連

○メディアホール

令和元年6月7日から9月5日は機種更新のため閉鎖。令和2年3月は新型コロナウイルス対策のためイベント中止。

| 年月 | 利用件数 | 年月 | 利用件数 |
|----------|------|----------|------|
| 2019年 4月 | 2 | 2019年10月 | 17 |
| 2019年 5月 | 2 | 2019年11月 | 16 |
| 2019年 6月 | 3 | 2019年12月 | 9 |
| 2019年 7月 | 0 | 2020年 1月 | 13 |
| 2019年 8月 | 0 | 2020年 2月 | 8 |
| 2019年 9月 | 4 | 2020年 3月 | 0 |

5. 業務関連

○演習室

演習室使用予定表

2019年度・前学期
第1クォーター

| 曜日 | 演習室 | 時 限 | | 時 限 | | 時 限 | | 時 限 | |
|----|-------------------------|-----------------------------------|-----------------------------------|---------------------------------------|---------------------------------|---|---------------------------------|----------------------|--|
| | | 8:30~10:00 1 時 限 | 10:20~11:50 2 時 限 | 12:40~14:10 3 時 限 | 14:30~16:00 4 時 限 | 16:20~17:50 5 時 限 | 18:00~19:30 6 時 限 | 19:40~21:10 7 時 限 | |
| 月 | 第6演習室 (4階)<56席> | 情報リテラシー入門Ⅰ (理学部) 中川 祐治 | 意思決定会計 (社会共創学部 3年) 岡本 直之 | 化学実験Ⅱ (理学部 3年) 垣内 拓大 | 4/15 | | | | |
| | 第4演習室 (4階)<56席> | | 環境学入門 (理, 工 2年) 古賀 理和 | 統計学 (法・2年) 佐藤 晋秋 | 製図基礎実習 (工学部2年) 朱 農 | | | | |
| | 第2・3演習室 (3階)<63・42席> | | 情報リテラシー入門Ⅰ (農学部) 野口 一人 | | 化学入門 (教, 理, 医(畜)・農) 古賀 理和 | | | | |
| | 第1演習室 (2階)<56席> | | | | | 夜 間 開 放 (17:00 ~ 21:00) <夏期休業中, 冬季休業中, 年度末・年度始(2月中旬~4月上旬)は休止> | | | |
| | メディア演習室 (2階北)<56席> | | | スポーツ健康情報処理演習 (社会共創学部 3年) 野口 一人 | 製図基礎実習 (工学部2年) 朱 農 | | | | |
| 火 | 第6演習室 (4階)<56席> | | 情報リテラシー入門Ⅰ (工学部) 小林 真也 | 情報リテラシー入門Ⅰ (教育) 裏 和宏 | 工学実践英語 (工 機械工学 2年) 有光 隆 | | | | |
| | 第4演習室 (4階)<56席> | | | 基礎フランス語Ⅰ (法文) 柳 光子 | | | | | |
| | 第2・3演習室 (3階)<63・42席> | 植染工学演習 (工・環境建設工学 3年) 中畑 和之 | | 生物学実験Ⅲ (理学部 3年) 佐藤 康 | 工学実践英語 (工 機械工学 2年) 柴田 諭 | 夜 間 開 放 (17:00 ~ 21:00) <夏期休業中, 冬季休業中, 年度末・年度始(2月中旬~4月上旬)は休止> | | | |
| | 第1演習室 (2階)<56席> | | | 心理学実験演習 (法文 2年) 十河 宏行 | 6/4 | | | | |
| | メディア演習室 (2階北)<56席> | | | 環境建設工学実験Ⅱ (工・環境建設科 3年) 藤森 祥文 | 高大連携科目 廣垣 光紀 | 4/17,5/29 | | | |
| 水 | 第6演習室 (4階)<56席> | 2019年度社会共創学部プレシメントテスト | | 4/17 | | | | | |
| | 第4演習室 (4階)<56席> | | 情報地球科学演習 (理 地球科学科 3年) 亀山 真典 | | 製図基礎実習 (工学部2年) 朱 農 | | | | |
| | 第2・3演習室 (3階)<63・42席> | 政策科学入門 (理・工 2年) 三上 了 | | | 製図基礎実習 (工学部2年) 朱 農 | 4/10 | | | |
| | 第1演習室 (2階)<56席> | 2019年度社会共創学部プレシメントテスト | | 4/17 | | 夜 間 開 放 (17:00 ~ 21:00) <夏期休業中, 冬季休業中, 年度末・年度始(2月中旬~4月上旬)は休止> | | | |
| | メディア演習室 (2階北)<56席> | | | | 製図基礎実習 (工学部2年) 朱 農 | | | | |
| 木 | 第6演習室 (4階)<56席> | | 意思決定会計 (社会共創学部 3年) 岡本 直之 | 情報リテラシー入門Ⅰ (医学部) 井門 俊 | 情報リテラシー入門Ⅰ (法文学部) 黒田 久泰 | | | | |
| | 第4演習室 (4階)<56席> | 生活科学入門 (法, 教, 社共, 農) 古賀 理和 | | | | | | | |
| | 第2・3演習室 (3階)<63・42席> | | | 統計学 (法・2年) 佐藤 晋秋 | | 夜 間 開 放 (17:00 ~ 21:00) <夏期休業中, 冬季休業中, 年度末・年度始(2月中旬~4月上旬)は休止> | | | |
| | 第1演習室 (2階)<56席> | | | スポーツ健康ICT活用演習 (社会共創学部 3年) 野口 一人 | | | | | |
| | メディア演習室 (2階北)<56席> | | | | | | | | |
| 金 | 第6演習室 (4階)<56席> | | 情報リテラシー入門Ⅰ (社会共創学部) 二宮 崇 | 情報リテラシー入門Ⅰ (工学部) 一色 正晴 | 設計製図 (工・機械工学 3年) 松下 正史 | | | | |
| | 第4演習室 (4階)<56席> | | | | | | | | |
| | 第2・3演習室 (3階)<63・42席> | 伝熱工学特論 (理工学研究科 博士前期課程) 向笠 忍 | | | | | 情報リテラシー入門Ⅰ (法・夜間主) 佐々木 陸志 | | |
| | 第1演習室 (2階)<56席> | 5/10 | | | | 夜 間 開 放 (17:00 ~ 21:00) <夏期休業中, 冬季休業中, 年度末・年度始(2月中旬~4月上旬)は休止> | | | |
| | メディア演習室 (2階北)<56席> | | | | | | | | |

* 使用予定表に授業科目の記載がない場合、また記載があっても授業等で使用していなければ、自習室として利用できます。
* 説明会・講習会、補講、集中講義等の一時使用については記載していません。

| 曜日 | 演習室 | 時 限 | | 時 限 | | 時 限 | |
|----|-------------------------|---|----------------------|----------------------|--|-----|--|
| | | 13:30~15:00 1 時 限 | 15:10~16:40 2 時 限 | 16:50~18:20 3 時 限 | | | |
| 土 | 第6演習室 (4階)<55席> | プログラミング演習Ⅰ (工・電気電子工学科 2年) 仲村 泰明 | | | 6/1, 8 (8:00~16:30) | | |
| | 第4演習室 (4階)<56席> | | | | | | |
| | 第2・3演習室 (3階)<63・42席> | プログラミング演習Ⅰ (工・電気電子工学科 2年) 仲村 泰明 | | | 4/13, 20, 27, 5/11, 18, 25 (8:00~16:30) | | |
| | 第1演習室 (2階)<56席> | 休 日 開 放 (10:00 ~ 17:00) <夏期休業中, 冬季休業中, 年度末・年度始(2月中旬~4月上旬)は休止> | | | | | |
| | メディア演習室 (2階北)<56席> | | | | | | |

5. 業務関連

演習室使用予定表

2019年度・前学期
第2クォーター

| 曜日 | 時限 | 8:30~10:00 | | 10:20~11:50 | | 12:40~14:10 | | 14:30~16:00 | | 16:20~17:50 | | 18:00~19:30 | | 19:40~21:10 | |
|-------------------------|----------------------------------|----------------------------------|--|--------------------------------------|---|--|--------------------------------|-------------------------------------|---|---|------|----------------------------------|--|-------------|--|
| | | 1時限 | | 2時限 | | 3時限 | | 4時限 | | 5時限 | | 6時限 | | 7時限 | |
| 月 | 第6演習室 (4階)<56席> | 情報リテラシー入門II (理学部) 大塚 寛 | | | | | | | | 社会統計学 (法・2年) 佐藤 晋秋 | | | | | |
| | 第4演習室 (4階)<56席> | 情報リテラシー入門II (理学部) | | 環境学入門 (理,工 2年) | | | | 製図基礎実習 (工学部2年) 朱 農 | | | | | | | |
| | 第2・3演習室 (3階)<63・42席> | 中川 祐治 | | 古賀 理和 | | 情報リテラシー入門II (農学部) | | 化学入門 (法,社共,理,医(看)) | | | | | | | |
| | 第1演習室 (2階)<56席> | 情報リテラシー入門II (理学部) 平田 浩一 | | | | 野口 一人 | | 古賀 理和 | | 夜 間 開 放 (17:00 ~ 21:00) <夏期休業中, 冬季休業中, 年度末・年度始(2月中旬~4月上旬)は休止> | | | | | |
| | メディア演習室 (2階北)<56席> | | | スポーツ健康情報処理演習 (社会共創学部 3年) 野口 一人 | | 情報リテラシー入門II (農学部) 堤 三佳 | | 製図基礎実習 (工学部2年) 朱 農 | | | | | | | |
| | 第6演習室 (4階)<56席> | 新入生セミナーA (社会共創学部 1年) 野口 一人 | | 7/30 | | 情報リテラシー入門II (工学部) | | 情報リテラシー入門II (教育) 河村 泰之 | | 工学実践英語 (工 機械工学 2年) 有光 隆 | | | | | |
| 第4演習室 (4階)<56席> | | | | | | | 情報リテラシー入門II (教育) | | 基礎フランス語2 (法文) 柳 光子 | | | | | | |
| 第2・3演習室 (3階)<63・42席> | 橋梁工学演習 (工・環境建設工学 3年) 中畑 和之 | | | | 小林 真也 | | 裏 和宏 | | 工学実践英語 (工 機械工学 2年) 柴田 諭 | | | | | | |
| 第1演習室 (2階)<56席> | | | | | | | | | 夜 間 開 放 (17:00 ~ 21:00) <夏期休業中, 冬季休業中, 年度末・年度始(2月中旬~4月上旬)は休止> | | | | | | |
| メディア演習室 (2階北)<56席> | | | | | 情報リテラシー入門II (工学部) 稲元 勉 | | 心理学実験演習 (法文 2年) 十河 宏行 | | 教材研究プロフェッショナル講座(学校教員向け講習会) | | 7/30 | | | | |
| 火 | 第6演習室 (4階)<56席> | 6/12 | | 社会共創学部 学修サポートフォーラム操作説明 会 | | 7/31 | | 環境建設工学実験II (工・環境建設科 3年) 藤森 祥文 | | | | | | | |
| | 第4演習室 (4階)<56席> | 情報リテラシー入門I (工学部) 一色 正晴 | | 情報地球科学演習 (理 地球科学科 3年) 亀山 真典 | | | | 製図基礎実習 (工学部2年) 朱 農 | | | | | | | |
| | 第2・3演習室 (3階)<63・42席> | 政策科学入門 (理・工 2年) 三上 了 | | 社会共創学部 学修サポートフォーラム操作説明 会 | | 7/31 | | | | 高大連携科目 廣垣 光紀 | | 6/26,7/3,10,17,24,31 | | | |
| | 第1演習室 (2階)<56席> | | | | | | | | | 夜 間 開 放 (17:00 ~ 21:00) <夏期休業中, 冬季休業中, 年度末・年度始(2月中旬~4月上旬)は休止> | | | | | |
| | メディア演習室 (2階北)<56席> | | | | | | | | | 製図基礎実習 (工学部2年) 朱 農 | | | | | |
| | 第6演習室 (4階)<56席> | | | | | 情報リテラシー入門II (医学部) 岡本 好弘 | | 情報リテラシー入門II (法文学部) | | 社会統計学 (法・2年) 佐藤 晋秋 | | | | | |
| 第4演習室 (4階)<56席> | 生活科学入門 (法,教,社共,農) | | | | 情報リテラシー入門II (医学部) | | 黒田 久泰 | | | | | | | | |
| 第2・3演習室 (3階)<63・42席> | 古賀 理和 | | | | 井門 俊 | | | | | | | | | | |
| 第1演習室 (2階)<56席> | | | | | | | 情報リテラシー入門II (法文学部) 谷 弘幸 | | 夜 間 開 放 (17:00 ~ 21:00) <夏期休業中, 冬季休業中, 年度末・年度始(2月中旬~4月上旬)は休止> | | | | | | |
| メディア演習室 (2階北)<56席> | | | | | スポーツ健康ICT活用演習 (社会共創学部 3年) 野口 一人 | | 情報リテラシー入門II (法文学部) 木下 浩二 | | 情報リテラシー入門I (農学部) 野口 一人 | | 6/13 | | | | |
| 水 | 第6演習室 (4階)<56席> | | | 情報リテラシー入門II (社会共創学部) 遠藤 慶一 | | 情報リテラシー入門II (工学部) | | 設計製図 (工・機械工学 3年) | | | | | | | |
| | 第4演習室 (4階)<56席> | | | 情報リテラシー入門II (社会共創学部) | | 一色 正晴 | | 松下 正史 | | | | 情報リテラシー入門II (法・夜間主) 二神 透 | | | |
| | 第2・3演習室 (3階)<63・42席> | | | 二宮 崇 | | | | | | | | 情報リテラシー入門II (法・夜間主) 佐々木 隆志 | | | |
| | 第1演習室 (2階)<56席> | | | | | 情報リテラシー入門II (工学部) 甲斐 博 | | | | 夜 間 開 放 (17:00 ~ 21:00) <夏期休業中, 冬季休業中, 年度末・年度始(2月中旬~4月上旬)は休止> | | | | | |
| | メディア演習室 (2階北)<56席> | | | | | 情報リテラシー入門II (工学部) 阿萬 裕久 | | 情報リテラシー入門II (工学部) 稲元 勉 | | 6/28 | | | | | |
| | 第6演習室 (4階)<55席> | | | | | プログラミング演習II (工・電気電子工学科 2年) 仲村 泰明 | | | | 6/15, 22, 29 | | | | | |
| 第4演習室 (4階)<56席> | | | | | | | | | | | | | | | |
| 第2・3演習室 (3階)<63・42席> | | | | | 生活科学入門 (法・夜間主) 古賀 理和 | | | | | | | | | | |
| 第1演習室 (2階)<56席> | | | | | 休 日 開 放 (10:00 ~ 17:00) <夏期休業中, 冬季休業中, 年度末・年度始(2月中旬~4月上旬)は休止> | | | | | | | | | | |
| メディア演習室 (2階北)<56席> | | | | | 生活科学入門 (法・夜間主) 古賀 理和 | | | | | | | | | | |

* 使用予定表に授業科目の記載がない場合、また記載があっても授業等で使用していなければ、自習室として利用できます。
* 説明会・講習会、補講、集中講義等の一時使用については記載していません。

| 曜日 | 時限 | 13:30~15:00 | | 15:10~16:40 | | 16:50~18:20 | |
|----|-------------------------|--|--|---|--|--------------|--|
| | | 1時限 | | 2時限 | | 3時限 | |
| 土 | 第6演習室 (4階)<55席> | プログラミング演習II (工・電気電子工学科 2年) 仲村 泰明 | | | | 6/15, 22, 29 | |
| | 第4演習室 (4階)<56席> | | | | | | |
| | 第2・3演習室 (3階)<63・42席> | | | 生活科学入門 (法・夜間主) 古賀 理和 | | | |
| | 第1演習室 (2階)<56席> | | | 休 日 開 放 (10:00 ~ 17:00) <夏期休業中, 冬季休業中, 年度末・年度始(2月中旬~4月上旬)は休止> | | | |
| | メディア演習室 (2階北)<56席> | | | 生活科学入門 (法・夜間主) 古賀 理和 | | | |

5. 業務関連

演習室使用予定表

2019年度・後学期
第3クォーター

| 曜日 | 時限 | 8:30~10:00 | | 10:20~11:50 | | 12:40~14:10 | | 14:30~16:00 | | 16:20~17:50 | | 18:00~19:30 | | 19:40~21:10 | |
|----|-------------------------|------------------------------------|----------------------------------|-----------------------------------|------------------------------|---------------------------------------|---------------------------------------|---------------------------------|--|--------------------------|-------|-------------|--|-------------|--|
| | | 1時限 | | 2時限 | | 3時限 | | 4時限 | | 5時限 | | 6時限 | | 7時限 | |
| 月 | 第6演習室 (4階)<56席> | | | | | | | | | | | | | | |
| | 第4演習室 (4階)<56席> | | | | | CAE基礎および演習 (社会共創学部 3年) 高橋 学 | | 生活科学入門 (理, 医, 農 1年) 古賀 理和 | | | | | | | |
| | 第2・3演習室 (3階)<63・42席> | | CAD実習 (工学部 機械 2年) 朱 轟 | | | コンピュータ基礎 (理学部・数学科 2年) 大塚 寛 | | | | | | | | | |
| | 第1演習室 (2階)<56席> | | | | | | | | | | | | | | |
| | メディア演習室 (2階北)<56席> | | | | | | | | | | | | | | |
| | | | | | | | | | | | | | | | |
| 火 | 第6演習室 (4階)<56席> | | | 12/3 | | 化学実験V (理学部理学科化学コース・3年) 垣内 拓大 | | | | データ分析 (教育学部) 河村 泰之 | | | | | |
| | 第4演習室 (4階)<56席> | | | | | | | 心理学実験演習 (法文 2年) 十河 宏行 | | 基礎フランス語3 (法文) 柳 光子 | | | | | |
| | 第2・3演習室 (3階)<63・42席> | | | | | | | SPH性格検査受験会 | | 11/26 | | | | | |
| | 第1演習室 (2階)<56席> | | | | | | | | | | | | | | |
| | メディア演習室 (2階北)<56席> | | | | | | 情報基盤システム特論 (工 情報工学コース MI) 阿萬 裕久 | | | | | | | | |
| | | | | | | | | | | | | | | | |
| 水 | 第6演習室 (4階)<56席> | | | | | GPSアカデミック受検 (社 産業マネジメント学科) 崔 英靖 | | 11/27 | | | | | | | |
| | 第4演習室 (4階)<56席> | | | | | | | | | | | | | | |
| | 第2・3演習室 (3階)<63・42席> | | 11月から使用 | コンピュータ基礎 (理学部・数学科 2年) 大塚 寛 | | コンピュータ基礎 (理学部・数学科 2年) 大塚 寛 | | 設計製図 (工学部 機械工学科) 堤 三佳 | | | | | | | |
| | 第1演習室 (2階)<56席> | | | | | | | | | | | | | | |
| | メディア演習室 (2階北)<56席> | | | | | | | | | | | | | | |
| | | | | | | | | | | | | | | | |
| 木 | 第6演習室 (4階)<56席> | | | | | | | | | | | | | | |
| | 第4演習室 (4階)<56席> | | | CAE基礎および演習 (社会共創学部 3年) 高橋 学 | | 応用化学実験II (工学部 2年) 林 実 | | | | 10/31 | | | | | |
| | 第2・3演習室 (3階)<63・42席> | 情報通信システム特論 (博士前期課程 1年) 都築 伸二 | プログラミング言語 (工学部工学科 2年) 柴田 論 | | C言語入門 (工学部工学科 1年) 柴田 論 | | C言語入門 (工学部工学科 1年) 柴田 論 | | | | 11/28 | | | | |
| | 第1演習室 (2階)<56席> | | | | | | | | | | | | | | |
| | メディア演習室 (2階北)<56席> | | | | | | | | | | | | | | |
| | | | | | | | | | | | | | | | |
| 金 | 第6演習室 (4階)<56席> | | | | | | | | | | | | | | |
| | 第4演習室 (4階)<56席> | | | | | | | | | | | | | | |
| | 第2・3演習室 (3階)<63・42席> | 制御工学II (工・電気電子 3年) 都築 伸二 | 制御工学II (工・電気電子 3年) 都築 伸二 | | 11/22 | 制御工学II (工・電気電子 3年) 都築 伸二 | | | | | | | | | |
| | 第1演習室 (2階)<56席> | | | | | | | | | | | | | | |
| | メディア演習室 (2階北)<56席> | | | | | | | | | | | | | | |
| | | | | | | | | | | | | | | | |

* 使用予定表に授業科目の記載がない場合、また記載があっても授業等で使用していない場合は、自習室として利用できます。
* 説明会・講習会、補講、集中講義等の一時使用については記載していません。

| 曜日 | 時限 | 13:30~15:00 | | 15:10~16:40 | | 16:50~18:20 | | |
|----|-------------------------|---|--|-------------|--|-------------|--|-----------------------------|
| | | 1時限 | | 2時限 | | 3時限 | | |
| 土 | 第6演習室 (4階)<55席> | 教員免許状更新講習 | | | | | | |
| | 第4演習室 (4階)<56席> | | | | | | | 11/16 |
| | 第2・3演習室 (3階)<63・42席> | | | | | | | |
| | 第1演習室 (2階)<56席> | 休 日 開 放 (10:00 ~ 17:00) <夏期休業中、冬季休業中、年度末・年度始(2月中旬~4月上旬)は休止> | | | | | | |
| | メディア演習室 (2階北)<56席> | | | | | | | 法情報論 (法文 2年~4年) 上山 友一 |

5. 業務関連

演習室使用予定表

2019年度・後学期
第4クォーター

| 曜日 | 演習室 | 8:30~10:00 1 時限 | | 10:20~11:50 2 時限 | | 12:40~14:10 3 時限 | | 14:30~16:00 4 時限 | | 16:20~17:50 5 時限 | | 18:00~19:30 6 時限 | | 19:40~21:10 7 時限 | |
|----|-------------------------|--------------------|--------------------------|------------------------------------|-----------------------------------|---------------------------------------|-------------------------------|-----------------------------------|--------------------|--------------------------|------|---------------------|------|---------------------|--|
| | | 月 | 第6演習室 (4階)<56席> | | | 地理情報システム学 (社会共創学部 3年) 渡邊 敬造 | | 地球物理学実験 (理学部地球科学科・2年) 出倉 春彦 | | | | 1/20~2/10 | | | |
| | 第4演習室 (4階)<56席> | | | 1/27,2/3,10 | | CAE基礎および演習 (社会共創学部 3年) 高橋 学 | | 生活科学入門 (理, 医, 農 1年) 古賀 理和 | | | | | | | |
| | 第2・3演習室 (3階)<63・42席> | | | CAD実習 (工学部 機械 2年) 朱 霞 | | 英語統一試験 GTEC CTE | | | | | | | | | |
| | 第1演習室 (2階)<56席> | | | | | | | 1/20 | | | | | | | |
| | メディア演習室 (2階北)<56席> | | | 英語統一試験 GTEC CTE | | | | 1/20 | | | | | | | |
| 火 | 第6演習室 (4階)<56席> | | 1/21 | | 1/21 | | 英語統一試験 GTEC CTE | | | | | | | | |
| | 第4演習室 (4階)<56席> | | | | 英語統一試験 GTEC CTE | | | 心理学実験演習 (法文 2年) 十河 宏行 | | 基礎フランス語4 (法文) 柳 光子 | | | | | |
| | 第2・3演習室 (3階)<63・42席> | | | | | | | 政策情報論 (法文学部 2年) 三上 了 | | | | 英語統一試験 GTEC CTE | 1/21 | | |
| | 第1演習室 (2階)<56席> | | 1/21 | | | | 1/21 | | | | | | | | |
| | メディア演習室 (2階北)<56席> | | | 英語統一試験 GTEC CTE | | 情報基盤システム特論 (工 情報工学コース M1) 阿萬 裕久 | | 英語統一試験 GTEC CTE | | | | 英語統一試験 GTEC CTE | 1/21 | | |
| 水 | 第6演習室 (4階)<56席> | | | | 地理情報システム学 (社会共創学部 3年) 渡邊 敬造 | | 2/12 | | | | | | | | |
| | 第4演習室 (4階)<56席> | | | | | 構造化学I (理学部 2年) 長岡 伸一 | | | | | | 2/12 | | | |
| | 第2・3演習室 (3階)<63・42席> | | 1/22, 1/29, 2/5, 2/12 | 情報活用実践 (教育 1年) 河村 泰之 | | 学修ポートフォリオの作成作業 | | 設計製図 (工学部 機械工学科) 堤 三佳 | | | | | | | |
| | 第1演習室 (2階)<56席> | | | | | | 2/12 | | | | | | | | |
| | メディア演習室 (2階北)<56席> | | | | | | | | | | | | | | |
| 木 | 第6演習室 (4階)<56席> | | 1/23 | | 地理情報システム学 (社会共創学部 3年) 渡邊 敬造 | | 1/30, 2/6, 13 | | 松山東高校GL事業 | | | 1/16, 30, 2/13, 20 | | | |
| | 第4演習室 (4階)<56席> | | | 英語統一試験 GTEC CTE | CAE基礎および演習 (社会共創学部 3年) 高橋 学 | | | 英語統一試験 GTEC CTE | | | 1/23 | | | | |
| | 第2・3演習室 (3階)<63・42席> | | | 情報通信システム特論 (博士前期課程 1年) 都築 伸二 | プログラミング言語 (工学部 工学科 2年) 柴田 論 | | C言語入門 (工学部 工学科 1年) 柴田 論 | | 英語統一試験 GTEC CTE | | 1/23 | | | | |
| | 第1演習室 (2階)<56席> | | | | 英語統一試験 GTEC CTE | | 1/23 | | | | | | | | |
| | メディア演習室 (2階北)<56席> | | | | 英語統一試験 GTEC CTE | | | | | | 1/23 | | | | |
| 金 | 第6演習室 (4階)<56席> | | | | | | | | | | | | | | |
| | 第4演習室 (4階)<56席> | | | | | 構造化学II (理学部 2年) 長岡 伸一 | | | | | | 2/7, 14 | | | |
| | 第2・3演習室 (3階)<63・42席> | | | | 英語統一試験 GTEC CTE | | | 政策情報論 (法文学部 2年) 三上 了 | | | | | | | |
| | 第1演習室 (2階)<56席> | | 1/24 | | 1/24 | | 1/24 | | 英語統一試験 GTEC CTE | | | | | | |
| | メディア演習室 (2階北)<56席> | | | | 英語統一試験 GTEC CTE | | | | | | | | | | |

* 使用予定表に授業科目の記載がない場合、また記載があっても授業等で使用していなければ、自習室として利用できます。
* 説明会・講習会、補講、集中講義等の一時使用については記載していません。

| 曜日 | 演習室 | 13:30~15:00 1 時限 | | 15:10~16:40 2 時限 | | 16:50~18:20 3 時限 | |
|----|-------------------------|---------------------|--------------------|---|--|-----------------------------|--|
| | | 土 | 第6演習室 (4階)<56席> | | | | |
| | 第4演習室 (4階)<56席> | | | | | | |
| | 第2・3演習室 (3階)<63・42席> | | | | | | |
| | 第1演習室 (2階)<56席> | | | 休 日 開 放 (10:00 ~ 17:00) < 夏期休業中、冬季休業中、年度末・年度始(2月中旬~4月上旬)は休止 > | | | |
| | メディア演習室 (2階北)<56席> | | | | | 法情報論 (法文 2年~4年) 上山 友一 | |

5. 業務関連

(5) センターイベント

○情報セキュリティセミナー

主 催：愛媛大学総合情報メディアセンター
日 時：令和元年9月20日（金）14：00～16：00
場 所：愛媛大学総合情報メディアセンター1F メディアホール
対 象：教職員

○キャンパス IT 授業

主 催：愛媛大学
日 時：令和元年9月9日（月）13:00～16:00
場 所：愛媛大学総合情報メディアセンター
対 象：高校生

(6) 各種委員会

【教員コア会議】

- ・平成31年4月11日（木） 令和元年度第1回総合情報メディアセンター教員コア会議
- ・令和元年5月13日（月） 令和元年度第2回総合情報メディアセンター教員コア会議
- ・令和元年6月11日（火） 令和元年度第3回総合情報メディアセンター教員コア会議
- ・令和元年9月6日（金） 令和元年度第4回総合情報メディアセンター教員コア会議
- ・令和元年10月9日（水） 令和元年度第5回総合情報メディアセンター教員コア会議
- ・令和元年11月6日（水） 令和元年度第6回総合情報メディアセンター教員コア会議
- ・令和元年12月4日（水） 令和元年度第7回総合情報メディアセンター教員コア会議
- ・令和2年1月8日（水） 令和元年度第8回総合情報メディアセンター教員コア会議
- ・令和2年2月5日（水） 令和元年度第9回総合情報メディアセンター教員コア会議
- ・令和2年3月3日（火） 令和元年度第10回総合情報メディアセンター教員コア会議

5. 業務関連

愛媛大学総合情報メディアセンター規則

平成30年4月1日
規則第 22 号

愛媛大学総合情報メディアセンター規則（平成23年規則第24号）の全部を改正する。

（趣旨）

第1条 この規則は、国立大学法人愛媛大学基本規則第30条第2項の規定に基づき、愛媛大学総合情報メディアセンター（以下「センター」という。）の組織及び運営に関し、必要な事項を定めるものとする。

（目的）

第2条 センターは、学内共同利用の施設として、愛媛大学（以下「本学」という。）の情報基盤の整備を図り、教育研究活動の支援及び情報技術に関する教育研究を行うとともに、学内外の情報化に寄与することを目的とする。

（部門）

第3条 前条の目的を達成するため、センターに次の各号に掲げる部門を置く。

- (1) 情報基盤・セキュリティ部門
- (2) ICT（Information and Communication Technology をいう。以下同じ。）利用教育・情報サービス推進部門

（組織）

第4条 センターに、次の各号に掲げる職員を置く。

- (1) センター長
- (2) 専任教員
- (3) 兼任教員
- (4) その他必要な職員（以下「センター職員」という。）

（センター長）

第5条 センター長は、本学の専任の教授のうちから、愛媛大学先端研究・学術推進機構学術研究会議（以下「学術研究会議」という。）が推薦し、学長が選考する。

2 センター長の任期は、2年とし、再任を妨げない。ただし、欠員が生じた場合の後任者の任期は、前任者の残任期間とする。

（専任教員）

第6条 専任教員は、学術研究会議が推薦し、国立大学法人愛媛大学人事委員会の議を経て、学長が選考する。

（兼任教員）

第7条 兼任教員は、本学の専任教員のうちから、センター長が当該教員の所属する部局等の長の同意を得て推薦し、学長が任命する。

2 兼任教員の任期は2年とし、再任を妨げない。ただし、欠員が生じた場合の後任者の任期は、前任者の残任期間とする。

（職務）

5. 業務関連

第8条 センター長は、センターの業務を掌理する。

- 2 専任教員は、センター長の職務を助け、センターの業務を遂行する。
- 3 兼任教員は、センターの専任教員とともにセンターの業務を遂行する。
- 4 センター職員は、センターの業務に従事する。

(学術研究会議)

第9条 センターの業務に関する重要な事項は、学術研究会議において審議する。

(運営委員会)

第10条 センターの運営に関する事項を審議するため、愛媛大学総合情報メディアセンター運営委員会（以下「運営委員会」という。）を置く

- 2 運営委員会に関し必要な事項は、別に定める。

(ICT利用教育推進室)

第11条 センターに、情報通信技術を利用した教育を推進するため、ICT利用教育推進室を置く。

- 2 ICT利用教育推進室に関し必要な事項は、別に定める。

(部会)

第12条 センターの業務に関する事項の企画立案等を行うため、必要に応じて部会を置くことができる。

- 2 部会に関し必要な事項は、別に定める。

(利用)

第13条 センターの利用に関する規程は、別に定める。

(分室)

第14条 センターに、医学部分室及び農学部分室を置く。

- 2 分室に関し必要な事項は、別に定める。

(事務)

第15条 センターに関する事務は、研究支援部情報システム課で処理する。ただし、分室における事務は、当該分室が所在する学部の事務部で処理する。

(雑則)

第16条 この規則に定めるもののほか、センターに関し必要な事項は、別に定める。

附 則

- 1 この規則は、平成30年4月1日から施行する。
- 2 愛媛大学総合情報メディアセンター教育デザイン室内規（平成25年4月1日制定）は、廃止する。

5. 業務関連

愛媛大学総合情報メディアセンター利用規程

平成16年4月1日
規則 193号

(趣旨)

第1条 この規程は、愛媛大学総合情報メディアセンター規則第13条の規定に基づき、愛媛大学総合情報メディアセンター(以下「センター」という。)が管理する計算機システム(以下「システム」という。)及びキャンパス情報ネットワーク(以下「ネットワーク」という。)の利用に関し、必要な事項を定めるものとする。

(利用者の資格)

第2条 システム及びネットワークを利用することができる者は、次の各号に掲げる者とする。

- (1) 愛媛大学の職員、学生及び附属学校生徒
- (2) その他センター長が適当と認めた者

(システム利用の手続)

第3条 システムを利用しようとする者は、所定の利用申請書をセンター長に提出するものとする。

2 前項の有効期限は、当該年度限りとする。

(ネットワーク利用の手続)

第4条 ネットワークを利用しようとする者は、所定の手続により、申請するものとする。

2 前項の有効期限は、ネットワーク利用が認められた者の資格が失われるまでとする。

(ポリシー等の遵守)

第5条 システム及びネットワークを利用する者は、国立大学法人愛媛大学情報システム運用基本方針、国立大学法人愛媛大学情報システム運用基本規則、国立大学法人愛媛大学情報システム運用・管理規程及び国立大学法人愛媛大学情報格付基準を遵守しなければならない。

(システム利用経費の負担)

第6条 利用に係る経費を負担する者(以下「支払責任者」という。)は、システム利用が認められた者の利用に係る経費を負担しなければならない。

2 前項の規定により支払責任者が負担すべき経費の額及び負担方法は、センター運営委員会の議を経て、センター長が別に定める。

(ネットワーク利用経費の負担)

第7条 ネットワーク利用が認められた者の負担すべき経費の額及び負担方法は、センター運営委員会の議を経て、センター長が別に定める。

(利用時間の制限等)

第8条 センター長は、システム及びネットワークの利用に関し、利用時間帯を制限し、又は指定することができる。

(機器の移動等の禁止)

第9条 センターの機器等に関し、次の各号に掲げる事項は禁止する。ただし、センター

5. 業務関連

長が特に必要と認めた場合は、この限りでない。

- (1) 機器の移動又は変更
- (2) ソフトウェアの変更，追加
(利用承認の取消し等)

第10条 センター長は、センターに関する諸規則に違反する者があるとき、又はセンターの運営に重大な支障を生じさせるおそれのあるときは、その者の利用の承認を取消し又は利用を停止することができる。

(雑則)

第11条 この規程に定めるもののほか、センターの利用に関し必要な事項は、センター運営委員会の議を経てセンター長が定める。

附 則

この規程は、平成16年4月1日から施行する。

附 則

この規程は、平成22年4月1日から施行する。

附 則

この規程は、平成23年4月1日から施行する。

附 則

この規程は、平成24年4月1日から施行する。

附 則

この規程は、平成24年9月12日から施行する。

附 則

この規程は、平成30年4月1日から施行する。

5. 業務関連

愛媛大学総合情報メディアセンター分室規程

〔平成16年4月1日〕
規則 192号

(趣旨)

第1条 この規程は、愛媛大学総合情報メディアセンター規則第14条第2項の規定に基づき、愛媛大学総合情報メディアセンター分室(以下「分室」という。)の組織及び運営に関し、必要な事項を定めるものとする。

(分室長)

第2条 分室に分室長を置く。

2 分室長は、当該分室が所在する学部の愛媛大学総合情報メディアセンター運営委員会委員(以下「運営委員会委員」という。)をもって充てる。

3 分室長の任期は、運営委員会委員として任命された期間とし、再任を妨げない。

4 分室長は、愛媛大学総合情報メディアセンター長の指示に従い、当該分室の業務を処理する。

(委員会)

第3条 分室の円滑な運営を図るため、分室に分室の運営に関する委員会を置くことができる。

(雑則)

第4条 この規程に定めるもののほか、分室に関する必要な事項は、分室長が定める。

附 則

この規程は、平成16年4月1日から施行する。

附 則

この規程は、平成23年4月1日から施行する。

附 則

この規程は、平成30年4月1日から施行する。

案内図



〒790-8577 松山市文京町3

3 Bunkyo-cho Matsuyama 790-8577, Japan

TEL 089-927-8803・FAX 089-927-8805

<http://www.cite.ehime-u.ac.jp/>

2020.10発行